

ビザンティン典礼における「テュピコン」の神学

—— 修道院典礼から司教区の典礼へ ——

秋 山 学

序

ビザンティン典礼を奉ずる教会、すなわちギリシア（ロシア）正教会とギリシア・カトリック教会の典礼は、初代教会以来の典礼の伝承を継承しており、その次第は非常に複雑である。その中で、たとえばラフマニノフ（1873—1943）らが曲を付したことで知られる主日聖体礼儀の次第は、近年CDが普及したことにより、それでも比較的良好に知られていると言えよう。もっとも、ビザンティン典礼の本質は聖体礼儀のみによってではなく、晩課と朝課をこれに併せて、初めて十全に理解される。ロシア正教会では近代になって晩課と朝課に、時課のひとつである一時課を加えて「徹夜禱」（晩禱）と称することが習慣となり、やはりラフマニノフによるもうひとつの名曲「晩禱」はこの次第を映したものとして貴重である。しかしラフマニノフも、歌詞の定まった歌唱部に限り自ら作曲したのみで、典礼の次第すべてが彼の曲によって明らかになるわけではない。もとより「晩課・朝課・一時課」という組み合わせはロシア正教会による新たな創意であるため、これがビザンティン典礼にとって普遍的なわけでもない。

筆者は2005年8月より2006年1月まで、筑波大学国際連携プロジェクト（長期派遣）により、ハンガリー・ニーレジハーザ市にあるギリシア・カトリック教会の研究所で在外研究に従事した。ニーレジハーザ市は事実上の司教座都市であり、その中心には司教座聖堂と司教館・神学院（大学）・セミナーリウム（司祭養成寄宿舎）・専門書店などギリシア・カトリック関係の諸施設が隣接して位置し、言わば複合施設の様相を呈している。「聖アタナズ・ギリシア・カトリック神学院」と名づけられた研究所・大学部門は、1995年よりローマのオリエンターレ研究学院と姉妹校協定を結び、学術活動も盛んである¹。一方セミナーリウムには、1年次より6年次まで38名の神学生たちが起居を共にしていた。筆者は、日々行われるビザンティン典礼の時課・聖体礼儀や共同での

食事，土・日曜日に司教座聖堂にて行われる晩課と朝課，盛式聖体礼儀など，毎日の日課を彼ら神学生たちと共にこなした。筆者にとっては，教授陣との交流を通じて教父学等の領域で多く在外研究の実りが得られたものの，わが国ではまず味わうことのできない体験として最も貴重だったのが，このビザンティン典礼の現場を追跡しえたという点であった。その次第は，カセットテープ数十本に収められ，この時期以外の当地滞在の際におこなった録音とともに，筆者にビザンティン典礼学の不可欠な資料を提供してくれている。

神学生たちは，セミナーリウムから神学院に通学して大学卒業資格を得るほか，主日・祝日に関しては，司教座聖堂で聖書朗読・先唱・奉灯係など典礼の補助的任務を務める。このため彼らは，主日・祝日の前晩18時15分からは司教座聖堂で晩課に（約45分間），また主祝日当日は司教座聖堂にて7時半より朝課（約1時間），10時より聖体礼儀に，そして同日夕刻18時15分からは再び司教座聖堂にて晩課に与る。これは，将来教区司祭となる神学生たちにとって，司教座聖堂で信徒たちが与る典礼の次第を理解させるうえでの良き経験となる。なおビザンティン典礼の考え方では，一日は前晩の夕刻より始まる。したがって土曜夕刻の晩課は翌主日のための晩課であり，主日夕刻の晩課は翌月曜日（週日）のための晩課である。

一方，ハンガリー北部スロヴァキアとの国境に位置する寒村ダーモーツでは，司教認可のもと，修道司祭2名（オロス・アタナーズ神父とコチシュ・フルップ神父）によりビザンティン典礼に基づく観想修道生活が行われている。この共同体（復活記念修道院）は，もとより上述のギリシア・カトリック神学院が教区司祭養成目的のものに限られる一方，修道会としてはバジリオ修道会が東方典礼カトリック唯一のものとして存在する中で，教区司祭として叙階された上記二人の独身司祭が，バジリオ会では達成され難いと判断した観想的生活を実現するため，特に司教認可を受けて建てた修道院である。彼らはビザンティン典礼の忠実な実践を目的として，社会主義体制崩壊の後，まずはベルギー・シュヴトーニュのベネディクト会修道院で修道実践の研鑽を積み，母国に戻って修道院を建て，いまま早朝5時の朝課より始まる祈祷サイクルを日々執り行っている。

上記の在外研究に先立ち，2004年8月14日（土）・15日（日）の両日，筆者はこのダーモーツ村の修道院に滞在した。ビザンティン典礼暦では8月15日が「聖母の御眠り・被昇天」の祝日に当たる。このような大祝日の場合，ビザンティン典礼本来のあり方から言えば，前晩から夜半にかけ「晩課・リティア・朝課」

を連続して行う。ニーレジハーザの司教座聖堂では、信徒たちの生活スタイルを考慮して、もとよりこのようなスケジュールで典礼が行われることはありえず、土曜日18時15分からの晩課（リティアつき）と、主日朝7時半からの朝課に分割して祈祷が行われている。しかしダーモーツの修道院では、本来のタイム・テーブルで典礼が行われている。そしてこの2004年はたまたま、8月15日が日曜日に当たっていた。

1. 「テュピコン」と典礼書

さて、ビザンティン典礼を挙げるための式次第書として「テュピコン」が伝えられている。これは、当該日が日曜日（主日）であるか週日であるか、その日に記念日を迎える聖人の種類・重要度がどのレベルであるのか、などに従い、いかなるあり方・順序でその日の典礼を行うべきかを細かく規定したものである。その次第は微細を極め、ビザンティンの伝承の真髓がここに盛り込まれているといっても過言ではない。特に、主日と祝日が重なるといった上述のようなケースには、この「テュピコン」の規定を詳細に確認し、規定どおりに諸祈祷文を辿りながら典礼を進めてゆく。これを完遂しうるのは、そのための知識の点でも時間的な面においても、修道院などの特殊な環境に限られるであろう。ハンガリーのギリシア・カトリック教会では、ダーモーツの修道院がこの環境に該当する。そして一般の司教区聖堂では、このテュピコンの精神性に違わぬよう、当日の典礼の重要な部分をピック・アップしながら限られた時間の中でこれを執り行っているのが現状である。

もとよりキリストの十字架刑は、ユダヤの陰暦による「ニサンの月」の14日（金曜日）—— すなわち月の中旬で満月の日 —— に行われ、彼の復活がその翌日曜日に起こったため、その後の教会会議により「復活祭」とは「春分の次の満月の次の日曜日」である、と定められた²。「主日」すなわち日曜日とは、週に一度「復活の寿ぎを行う日」であり、このように日曜日の背景には陰暦に基づく復活祭の日取りがある。その一方で、年間カレンダーの一定日に対し、ビザンティン典礼教会はある特定の聖人の記念を行ってきた。これが「固定祝日」となっている。復活の寿ぎは何にも増して最優先されるため、主日と祝日の記念をとともども行う必要がある場合にも、復活の記念をまず行い、祝日性はこれに続けて記念する、というのが「テュピコン」の基本的精神である。

ところで、ニーレジハーザのセミナーリウムが教区司祭の養成を目指してい

ると言っても、ダーモーツで行われている修道院典礼と修道生活への「拓け」「招き」の必要性は十分に認識されている。このことは、セミナーリウムでは神学生たちのために土曜朝にも午前7時より朝課が行われ、その経験が週日朝課を主宰する能力をも培っている、という事実が顕著に示している。

ここで典礼書のシステムについての解説が必要であろう。ハンガリーのギリシア・カトリック教会では、総じて信徒の階層として3段階が意識され実践されていると言える。すなわちそれは

- 1) 司教区聖堂
- 2) ニーレジハーザ・セミナーリウム
- 3) ダーモーツ修道院

の3段階であり、これらはそれぞれ

- 1) 一般信徒のレベル
- 2) 司祭養成のレベル
- 3) 修道生活

を表している。そして殊に日々の典礼を実践するに際しては、

- 1) 主日・祝日の典礼への参加
- 2) 週日を含めた典礼全般の主宰
- 3) ビザンティン典礼の完遂

が主目標とされている。なお本稿は晩課・朝課のみを論述の対象とするため、聖体礼儀や時課に関しては項を改めて論ずるが、1)の一般信徒向けの配慮としては、週日にも一日に複数回(朝・夕)聖体礼儀が行われているという点が挙げられよう。また2)に関して言えば、セミナーリウムでは毎朝時課と聖体礼儀が行われている。

上記の3段階については、事実上、ハンガリーのギリシア・カトリック教会で出版されている典礼書目もこの3種に対応する。現在、典礼書としては次の3つのレベルのものが出版されている。

- A) 信徒用歌唱書『主をほめたたえよ!』

(*Dicsérvjétek az Urat!*, Nyíregyháza 1994).

主日・祝日の前晩晩課、主日朝課・主日晚課の歌唱句をおもに含む。連祷などの共通句については、聖体礼儀の部分に掲げ、朝課・晩課部には省略してある。週日の聖体礼儀のための可変部テキストも掲載されている。

- B) 司祭用祈祷書『主の名をほめたたえよ!』

(*Dicsérvjétek az Úr nevét!*, Nyíregyháza 1993).

これは十全な配慮をもって編纂された祈祷書であり、テュピコン(式次第書)の記載事項に該当する手引きも適宜収められていて至便である。なおこの祈祷書には、別冊のかたちで「メノロギオン」(*Ménologion* I-X, Miskolc 1939)が付録となっている³。これにより日々の聖人に定められたトロパールとコン

タークが判るが、聖人の分類に関しては「共通メネア」のレベルを採用している。

C) 修道院典礼用祈祷書『月課書』(Ménea)

この「メネア」は、2ヶ月毎の計6巻より成る予定であるが、現在刊行の途上にあり、第4巻までが既刊である⁴。1年間を通じて全日の全祈禱文を収める。聖人の分類に関してB)が「共通メネア」を目指しているのに対し、C)は個々の聖人すべてに固有の典文を載録する。ただしこれがすべて刊行された暁にも、B)の祈祷書の意味は十分に残ると思われる。

このように、ハンガリーのギリシア・カトリック教会には、典礼書のあり方を含め、その実践の次第に3段階が設けられている。信徒数30万人を数えるこの共同体の成員すべてに対し、ビザンティンの伝承を詳細なレベルにいたるまで徹底しようとするのは無理であり、意味もない。この司教区共同体では、一般信徒に対して、適宜典礼の簡略化を施した上で、主日・祝日に関しては聖体礼儀のみならず、晩課・朝課にも与かってビザンティン典礼の伝承を伝える担い手となるよう招いている。この「簡略化」は、正教会からしばしば「ロマナイゼーション」(「ローマ化」)と批判されることがあるが、本来の典礼、すなわち修道院典礼の次第を正確に認識した上で、この「簡略化」のあり方を検討してみることは、「伝承」の中で最も重要なものが一体何なのか、あるいは少なくとも、何であると認識されているのか、を伝えてくれるであろう。本稿は、このような展望のもとに、修道院典礼から司教区聖堂での典礼への「簡略化」の実態を知る作業を通して、「テュピコン」の本質と、ビザンティン典礼の基本的な精神性を明らかにすることを旨とする。

したがって以下の記述に当たっては、ダーモーツの「2004年8月15日」を基礎に据え、その晩課(リティア付き)と朝課の次第を忠実に復刻するとともに、「テュピコン」に記された様々なレベルでの規定をあわせ考察することに努めたい。その際、他の機会に収録した司教座聖堂における一般信徒向けの晩課・朝課の実態を参照し、どの部分で正確に「テュピコン」の規定が墨守され、またどの部分が省略されているかにも注意を払うことにする。

2. 典礼書の内容

本稿では、司教区聖堂で一般的に用いられている上記A)の信徒用歌唱書(*Dicsérvétek az Urat!*)の記載内容を最も一般的な骨格として意識しており、

最初にその内容を以下に略述する。ただしこの本は「テュピコン」すなわち式次第の指示に当たる記述を省略しているため、B) 司祭用祈祷書 (*Dicsérvjétek az Úr nevét!*, Nyíregyháza 1993) から「テュピコン」の記述に当たるものを随時補充する必要がある。以下本文中では「司祭用祈祷書～頁」という表記に一括してこれを紹介するが、そこに「テュピコン」の内容が含まれる。そのためまずB) の梗概を提示しておく必要があるだろう。これは全体で1000頁以上に及ぶ大冊であるが、判型は文庫版よりもやや大きめ程度のコンパクトなものである。祈祷文の改変等に伴う意図的な落頁があり、巻頭も15頁より始まる。

あ。「共通祈祷文」15-26頁、い。「閉祭のため司祭の祈り」26-43頁、う。「個人での祈り」45-95頁、え。「朝課」96-166頁、お。「時課・聖体礼儀」167-347頁、か。「晩課」348-384頁、き。「夜半課」385-433頁。

以下、く。「『八調書』主日の歌」〔第1調～第8調〕434-539頁、け。「『八調書』週日の歌」540-590頁 が掲載される。

これに続き591-955頁に *Triód* (「三歌斎経」) および *Pentekosztáron* (「五旬経」) からの内容が記される。これは受難節・復活節の典礼に関わるものであり、本稿での考察の対象からは外れる。

そして、こ。「共通メネアより」956-1063頁、さ。「聖母讃歌」1064-1110頁と続いている。

では次に、A) の内容の略述に移る。こちらも全体で950頁を越えるが、やはりコンパクトサイズの携帯版である。まず1頁から23頁までは一般的な祈祷文、すなわち「主の祈り」あるいは「使徒信条」などが掲載されている。以下、上掲の司祭用祈祷書と同様、「朝課」「聖体礼儀」「晩課」の順で載る。神学的には「晩課」「朝課」「聖体礼儀」の順であるが、この点も信徒・教区司祭の生活に合わせた感覚で編纂してある。

以下、ビザンティン教会特有の用語に関する解説は、本文中で適宜補足的に注記することとする。

I 1) 朝課 (24-41頁)

- 一. 開祭 二. 詩篇3 三. 多憐歌 四. 復活讃歌 五. 昇階唱 六. プロキメン前後 七. 福音朗読前後 八. 詩篇50後ステヒラ 九. カーノン〔第8歌後／カタヴァスィア先句／第9歌前／聖母讃歌句・後句〕 十. カーノン後 十一. 光の歌後 十二. 讃美ステヒラ先句+詩篇150篇 十三. 大栄唱 十四. 読誦栄唱

各項に冠した漢数字は便宜的なものであり、以下の本文中にもこれを用いる。

本文では第4章において、朝課について考察する。

2) 聖母のカーノンと季節固有のカタヴァシア (42-52頁)

1. 聖母 2. 降誕節 3. 主の公現 4. 主の奉獻 5. 聖十字架
これは上記1)の九、および十。が可変部であるため、そのヴァリエーションを掲載するものである。

3) 主日の「光の歌」と「福音ステヒラ」(53-64頁)

1. 光の歌 2. 聖母讃歌 3. 福音ステヒラ
これも、上記1)の十一。が可変部であるため、そのヴァリエーションの載録である。

II 1) 金口の聖ヨハネ典礼 (65-91頁)

2) 週日のトロパール・コンターク・プロキメン・拝領唱 (92-97頁)

3) 特別の意向による可変部分 (トロパールなど; 98-106頁)

このIIは聖体礼儀にかかわる部分であり、本稿では扱わない。

III 晩課とリティア (107-120頁)

一. 開祭 二. 詩篇103 三. 「主よ、あなたに向かって」 四. ステヒラ 五. 夜の感謝の歌 六. 各曜日プロキメン 七. 「われらの主よ、この夜」 八. 先句ステヒラ 九. 聖シメオンの歌 十. リティア

十. のリティアは、祝日の前晩に晩課に組み込んで執り行われるもので、パン、小麦、ぶどう酒、オリーブ油の祝福を伴い、東方典礼に固有の儀礼とも言えるものである。晩課・リティアの内容については、本稿の第3章で考察する。

IV 「八調書」主日の歌〔第1調～第8調〕(121-231頁)

これは上記司祭用祈祷書のく。に当たるものであり、「八調書」とは、B) 司祭用祈祷書の434頁によれば、「週に従って変化する教会の唱歌を、ダマスコの聖ヨハネ (650—750) が基礎づけた8つの調べに対応する形で、8種類のヴァリエーションにおいて収録する」ものである。「個々の歌ないしヴァリエーション、およびそこに属する歌のグループは、土曜晩課をもって始まり、一週間にわたって用いられる。調は、トマスの主日 (復活祭翌週の主日) より始まる一年間を通じ、大斎第五主日 (復活祭の前々週主日) まで、数に応じた順に進み、第8調から再び第1調へと戻る」とされる。

この「8」を基調とする神学は、この世のサイクルの象徴である「7」を常に超越した天上的サイクルにより、復活の終末論的生命共同体が展開することを表したものである。司教区用祈祷書は、調ごとに8章の構成となっており、各調歌詞の内容は、一般信徒の用に供することを意図し、次のように主日前晩

晩課・主日朝課・主日聖体礼儀・主日晚課に限定して可変部が掲載されている。

- ①主日前晩晩課 a「主よ、あなたに向かって」の後 b大ドグマティコン c先句スティヒラ d小ドグマティコン eトロパール
 ②主日朝課 aトロパール bカティズマーリオン c「栄光は」の後 d「今も」の後 eカティズマーリオン f「栄光は」の後 g「今も」の後 hイパーコイ iプロキメン jカーノン k同第Ⅵ歌後のコンターク lイコス m讚美のスティヒラ
 ③主日聖体礼儀（本稿の対象外）
 ④主日晚課 a「主よ、あなたに向かって」の後 b聖母讚歌 c先句スティヒラ d聖母讚歌

このⅣの①②④に関しては、上掲したⅠ1)およびⅢの漢数字番号と併せ、対応箇所を以下本文中に適宜注記する。

V 教会年間の固定祝日（485-845頁；「半移動祝日」を含む）の祈祷文

ここには、9月より始まるビザンティン典礼暦のなかで、定められた日付を持つ重要な記念日に用いられる祈祷文が掲載される。記載の次第は、各祝日に関して、順に祝日前晩晩課・祝日朝課・祝日聖体礼儀・祝日晚課となっており、記載内容は、細部に関して異同はあるものの、総じて上記Ⅳの①②③④に準じる。祝日性とは、主日から復活の要因を抑え、記念すべき個々の祝祭性を顕らかにしたものと見えよう。そのような重要な記念日とは、

聖母の誕生（9/8） 十字架称賛（9/14） 聖母の御守り（10/1） 第七公会議の師父の日曜日（10/11—17の間の日曜日） 聖ミハイ・ガーボル大天使（11/8） 聖母の神殿奉獻（11/21） 聖ミクローシュ司教（12/6） 聖母の無原罪の御宿り（12/8） 古の師父の日曜日（12/11—17の間の日曜日） 旧約の聖師父の記念（12/18—24の間の日曜日） 主の降誕前晩（12/24；「王の時課」） 主の降誕（12/25） 降誕の翌日・聖母の記念（12/26） 降誕の翌々日・聖ステファノ殉教者（12/27） 主の親族（特にダビデ、ヨセフ、ヤコブ）の記念日（12/26—31の間、降誕の翌日曜日） 主の割礼&聖大バジル（1/1） 主の洗礼・公現前晩（1/5；「王の時課」） 主の洗礼・公現（1/6） 三人の聖なる主司祭（大バシレイオス、ナジアンブスの聖グレゴリオス、金口の聖ヨハネ、1/30） 主の神殿奉獻（2/2） 聖母へのお告げ（3/25） 聖ゲオルギオス大殉教者（4/23） 洗礼者聖ヨハネの誕生（6/24） 聖ペトロ・パウロ主使徒（6/29） 初期六公会議の真なる信の師父た

ち（7/13—19の間の日曜日） 聖エリヤ預言者（7/20） 主の変容（8/6）
聖母の御眠りと被昇天（8/15） 聖イシュトヴァーン使徒王（8/20） 洗
礼者聖ヨハネの斬首（8/29）。

これらの中でも重要な祝日には、その記念が前後の一定期間に及ぶものがあり、これを「前祝日・後祝日」と呼んでいる（以下本文中で「祝日期間中」と呼ぶもの）。上で下線を付した日々がその範疇に属し、各々の祝日期間は

9/8（9/7—9/12） 9/14（9/13—9/21） 11/21（11/20—11/25）

12/25（12/20—12/31） 1/6（1/2—1/14） 2/2（2/1—2/9）

3/25（3/24—3/26） 8/6（8/5—8/13） 8/15（8/14—8/23）

と定められている。また、次に挙げるのが「リティア」を伴う祝日である。

9/8, 9/14, 10/1, 11/8, 11/21, 12/6, 12/25, 1/1, 1/6, 1/30,
2/2, 3/25, 4/23, 6/24, 6/29, 7/20, 8/6, 8/15。

以下本文中で祝日（8月15日）の祈祷文が参照される際には、「V」としてこの項を指示する。

VI 232頁から481頁までは、受難節から聖霊降臨後第一主日（諸聖人の祝日；「万聖節」）までの「移動祝日」、すなわち復活祭の日付に基づいて年ごとに定められる祝日の祈祷文が掲載されている。なおこの間の祝日で「リティア」を伴うのは「枝の主日」「主の昇天」「聖霊降臨」である。これらは本稿の対象外である。

VII 「共通メネア」より聖人の記念用（847-892頁）

これは上記のこ。をさらに簡略化したものであり、順に 1 預言者 2 一使徒 3 複数使徒 4 一司教 5 複数司教 6 証聖司教 7 聖生師父 8 隠修士 9 奉仕医 10 殉教者 11 複数殉教者 12 司教殉教者 A 聖女&おとめ B 殉教女 に分かれている。この点にも工夫が凝らされていて、たとえばここには、B) 司祭用祈祷書のこ。に見られる「天使」という分類がないが、天使の記念は事実上11月8日に限られ、これは前掲の「固定祝日」に含まれている。

VIII 聖母讃歌（893-899頁）

これは上記のさ。を簡略化したものであり、

ア. 土曜晩（主日前晩）・主日朝「トロパール後・復活散会聖母讃歌」〔第1調～第8調〕

イ. 主日晚「先旬ステヒラ「栄光は」の後」〔第1調～第8調〕 これは重載でありIV④dのものと同一。

ウ. 主日晚・月曜朝「散会聖母讃歌」〔第1調～第8調〕

に分けて記載されている。土曜晩・主日晩とも晩課の構造は同一であるが、その意味が異なる。聖母讃歌は晩課で3度歌うが、

- | | |
|------------------|--------------------|
| 1 度目は 土曜] IV① b | 日曜] IV④ b |
| 2 度目は 土曜] IV① d | 日曜] IV④ d = VIII イ |
| 3 度目は 土曜] VIII ア | 日曜] VIII ウ |

であり、このうち3度目のVIIIアを、主日の朝課（IV②aの後）でも歌う、ということになる。

IX 典礼暦カレンダー（929-937頁）

2月29日を含む1年366日について、それぞれの日付に固有の聖人が誰であるかが記載されている。

本稿は、ビザンティン典礼の主日前晩晩課および主日朝課の実際に即して、その最も詳細かつ正則なあり方を紹介するとともに、その式次第を規定している「テュピコン」の根底に潜む神学性を明らかにし、かつそれが司教区聖堂での一般信徒レベルに合わせた典礼に、いかなる形で反映されているかを考察しようと試みるものである。

3. 2004年8月14日(土)「聖母の御眠り」前晩晩課

まず晩課についてであるが、上記Ⅲ. で示した司教区用一般祈祷書の項区分番号を、以下の記述の中でも用いることとする。これによって、司教区での典礼がどの部分を簡略化しているかのおおまかな目安が得られるであろう。

「大晩課」について、司祭用祈祷書353頁はこう記している。「主日前晩、および祝日の前晩には、聖入をとまなう大晩課をおこなう。時に応じて旧約聖書朗読を含める。大祝日の前晩には小晩課をおこなう。これは大連禱、カティズマ、完遂連禱を伴わないものである。同日の夜半には、朝課の前にリティアをとまなう大晩課をおこなう。主の大祝日と聖堂守護聖人の祝日の午後にも大晩課をおこなう。他の日でいかなる祝日要因もない場合には週日晚課をおこなう」。すなわち、大祝日の前晩にはまず小晩課を行い、改めてリティアを伴う大晩課と、これに続けて祝日当日の朝課を（つまり夜半に）行うものとされる。しかし実際の慣例では、祝日前晩に小晩課が行われることはなく、もっぱらリティア付きの大晩課が行われる。

一. リティアがない場合、「大晩課」は、次のような「常なる初め」と呼ばれる一連の定式文より始められる。司祭「われらの神は永遠に讃えられますよ

うに、今もいつも世々とこしえに」 会衆「アーメン。われらの神、あなたに
栄光あれ、あなたに栄光あれ。天の王、慰め主、真理の霊、すべてに遍在し万
物を満たす方、あらゆる善の泉、生命の与え主、来たりてわれらのうちに住み
たまえ。われらをあらゆる穢れから清めたまえ。善き方よ、われらの霊を救い
たまえ」。「聖なる神、聖なる力、聖なる不死なる者よ、われらを憐れみたまえ」
(×3；以降「聖なる神」と省略)。「栄光は父と子と聖霊に」(以降「栄光は」
と省略)、「今もいつも世々とこしえに、アーメン」(以降「今も」と省略)。「聖
三位一体よ、われらを憐れみたまえ。われらの主よ、われらを罪から浄めたま
え。創造主よ、われらの罪を赦したまえ。聖なる者よ、われらを顧み、あなた
の名によってわれらの病を癒したまえ」。「主よ、憐れみたまえ」(×3)。「栄
光は」「今も」。「主の祈り(マタイ六9-13)」 司祭「国と力と栄光は、父と子
と聖霊よ、あなたのもの、今もいつも世々とこしえに」 会衆「アーメン」。「主
よ、憐れみたまえ」(×12)。「栄光は」「今も」。

これに続いて「来たれ、われらの王、われらの神に祈ろう。来たれ、キリス
ト・われらの王、われらの神に祈ろう。来たれ、伏し拝もう、そしてイエス・
キリストその方、われらの王、われらの主、われらの神に祈ろう」。続いて詩
篇103編が唱和される。诗篇朗誦の終わりに「栄光は」「今も」、アレルヤ(×
3)、「神よ、栄光はあなたに」と唱えられる。

8月15日前晩はリティア付き大晩課であったため、次のように始められた。
会衆「主よ、命じたまえ」 司祭「聖にして一、生命を与え分かれざる三位一
体に、変わることなく、今もいつも世々とこしえに栄光あれ」 会衆「アーメ
ン」 「来たれ、われらの王、われらの神に祈ろう。来たれ、キリスト・われ
らの王、われらの神に祈ろう。来たれ、伏し拝もう、そしてイエス・キリスト
その方、われらの王、われらの主、われらの神に祈ろう」。

二. いずれの場合にも、この後诗篇103編が唱和される。诗篇朗誦の終わりに
「栄光は」「今も」、アレルヤ(×3)、「神よ、栄光はあなたに」と唱和され
る。

続いての「大連禱」は次のように進められる。司祭「平安のうちに主に願お
う」 会衆「主よ、憐れみたまえ」(以下司祭の各導句に続ける) 「天の平
和、われらの霊の救いのために主に願おう」 「全世界の平和、神の聖なる教
会の栄え、われらすべての者の一致のために主に願おう」 「この聖なる家の
ため、また信と熱意と神への畏れをもってここに集い来る者すべてのために、
主に願おう」 「われらの聖にして普遍なる牧者の長、～教皇のため、神を愛

するわれらの～司教のため、浄らかなる司祭職にある者のため、全教会と民のために主に願おう」 「この町のため、すべての町、共同体、地域、そこに住む信徒たちのために主に願おう」 「気候の恵みある温順、大地の作物の豊かな実り、平和な日々のため、主に願おう」 「航行する者、旅路にある者、病める者、疲れたる者、飢える者たちのため、またこれらの者の解放のため、主に願おう」 「主がわれらをあらゆる心労、怒り、危険、欠乏から救って下さるよう、主に願おう」 「神よ、あなたの憐れみによって、われらを守り、救い、憐れみ、強めたまえ」 「いと聖にして浄らか、いと祝せられし栄えあるわれらの王妃、神の母にして常に処女なるマリアを、すべての聖人とともに思い起こしつつ、われら自身とお互いを、そしてわれらの生命すべてを、われらの神なるキリストに献げよう」 会衆「主よ、あなたに」 司祭「あらゆる栄光、愛、崇敬は、父と子と聖霊よ、あなたにこそふさわしい。今もいつも世々とこしえに」 会衆「アーメン」。

次いで「カティズマ」である。これは晩課・朝課において読誦するために、詩篇全150編を順に20部に分けたものである。各カティズマは3部に分かれ、各々が「アンティフォン」と呼ばれる。その内実は順に、①1-8 (1-3; 4-6; 7-8) ②9-16 (9-10; 11-13; 14-16) ③17-23 (17; 18-20; 21-23) ④24-31 (24-26; 27-29; 30-31) ⑤32-36 (32-33; 34-35; 36) ⑥37-45 (37-39; 40-42; 43-45) ⑦46-54 (46-48; 49-50; 51-54) ⑧55-63 (55-57; 58-60; 61-63) ⑨64-69 (64-66; 67; 68-69) ⑩70-76 (70-71; 72-73; 74-76) ⑪77-84 (77; 78-80; 81-84) ⑫85-90 (85-87; 88; 89-90) ⑬91-100 (91-93; 94-96; 97-100) ⑭101-104 (101-102; 103; 104) ⑮105-108 (105; 106; 107-108) ⑯109-117 (109-111; 112-114; 115-117) ⑰118 (-72; -131; -176) ⑱119-133 (119-123; 124-128; 129-133) ⑲134-142 (134-136; 137-139; 140-142) ⑳143-150 (143-144; 145-147; 148-150) となっている(第17カティズマは詩篇118編単独で構成される)。なおビザンティン典礼教会ではギリシア語訳旧約聖書の詩篇番号を踏襲しているため、現行の詩篇番号とは1つずつずれている場合が多い。

基本的には朝課で計2個カティズマ、晩課で1個カティズマを読む。具体的には、復活を寿ぐ日曜の前晩=土夕に第1カティズマ、以降順に、日朝2&3; 日夕なし(リティアつきの大晩課が行われた日の夕方も同様); 月朝4&5; 月夕6; 火朝7&8; 火夕9; 水朝10&11; 水夕12; 木朝13&14; 木夜15; 金朝19&20; 金夕18; 土朝16&17という順に読まれる。

土曜晩課は第1カティズマである。「メノロギオン」に載る8月15日のテュピコンには「もし祝日が主日に当たったなら、祝日の記念に対して復活の記念が優先され、先行する」とあり、同日晩課の規定には、「〈幸いなる者〉という第1カティズマの第1アンティフォンが歌われる。もし主日に当たったなら、第1カティズマを最後まで（歌う）」とあり、デーモーツ修道院ではこの規定どおりに、まず第1カティズマ第1アンティフォンから、当該詩篇を2～3節ずつに区分し、「アレルヤ」×3をはさみ、歌唱部と速読部を折り合わせつつ進んだ。第1カティズマは詩篇第8編までであるが、途中第3篇、第6篇の後、すなわち各アンティフォンの後でそれぞれ「栄光は」「今も」「アレルヤ×3、主よ、栄光はあなたに」（×3）と唱え、さらに「主よ憐れみたまえ」×3、「栄光は」「今も」と唱えて次のアンティフォンに移る。

司教区聖堂の土曜晩課でも、第1カティズマから詩篇第1編「幸いなる者、罪びとの道に立たず、不満を鳴らす者の座に就くことのない者…」が必ず歌われるが、この際当該アンティフォンに対応するかたちで用意された3個の「章句」が用いられ、この章句の1句ごとに会衆が「アレルヤ」（×3）と応唱し、末尾に「神よ、栄光はあなたに」と歌う。ただし司教区聖堂で行われる土曜晩課・主日朝課のうち、主日朝課でこの規定どおり行われることはなく、このカティズマの部分は省略の対象となっていた。朝課は以下で見るように、晩課よりも長大なためであろう。

第8編が済むと次に小連禱である。司祭「繰り返して平安のうちに主に願おう」 会衆「主よ、憐れみたまえ」（以下司祭の各導句に続ける） 司祭「神よ、あなたの憐れみによって、われらを守り、救い、憐れみ、強めたまえ」 「いとも聖にして浄らか、いとも祝せられし栄えあるわれらの王妃、神の母にして常に処女なるマリアを、すべての聖人とともに思い起こしつつ、われら自身とお互いを、そしてわれらの生命すべてを、われらの神なるキリストに献げよう」 会衆「主よ、あなたに」 司祭「権威、国、力そして栄光は、今もいつも世々とこしえに」 会衆「アーメン」。

三、これが済むと「主よ、あなたに向かってわたしは叫ぶ、聞き届けたまえ。わたしの祈りの声に耳を傾けたまえ、わたしはあなたに向かって叫ぶ。主よ、聞き届けたまえ。わが祈りが、あなたの御顔の前に立つ香の煙のように、立ち昇りますように。わが両の手は、夕べの生贄として差し上げられる。主よ、聞き届けたまえ」と詩篇140篇の冒頭部を歌う。これは「主よ、あなたに向かって」の唱句と呼ばれる。

司祭用祈祷書の359頁には「カティズマ読みと小連祷の後、当該日の規定に
適う最初のスティヒラの調に従い、詩篇第140篇の最初の2章句を歌う。その
間司祭は祭壇と聖堂全体に香を振る。残りの章句および詩篇141篇は、詩とし
て読誦し、スティヒラの先句に及ぶ」とあり、ダーモーツの修道院では、詩篇
第140篇の残りの部分と第141編を速読していた。一方司教区聖堂では、上記の
2章句分を歌うのみであった。

四. 続いて「スティヒラ」が歌われる。これに関しては詳細な規定がある。
司祭用祈祷書362-3頁；「最後の4, 6, 8ないし10個の先句に、当日の規定
に応じてスティヒラを歌う。

a. 小晩課〔省略〕

b. 大晩課におけるその数は、主の祝日ないし聖母の祝日が週日に当たった
場合には、すべて祝日のスティヒラ。聖人の祝日には、「メネア」に掲載され
る数を聖人に歌い、「栄光は」聖人、「今も」聖母讃歌。もしそれがない場合に
は「栄光は」に対応する調の、土曜晩課の聖母讃歌。金曜はその週の調のもの。
祝日期間中は、祝日のものを3つ、聖人を5つ、「栄光は」聖人、「今も」祝日。
土曜日午後には、調のものより7つ、聖人を3つ、「栄光は」聖人。もし聖人
が二人なら、調より4つ、第1聖人に3つ、第2聖人に3つ、「栄光は」聖人。
「今も」調のドグマティコン。祝日期間中は4スティヒラを調のもの、3つを
祝日、3つを聖人、「栄光は」もしあれば聖人、なければ祝日、「今も」調のド
グマティコン。もし聖人が2人いても、第2番目は規定に従い他の日に移して
記念する。もし6スティヒラの聖人が主日に当たったなら、土曜晩課で復活ス
ティヒラを6つに減らし、聖人を4スティヒラ歌う。もし大聖人が祝日期間中
を除く主日に当たったなら、4スティヒラを調より、6スティヒラを聖人より
歌う。「栄光は」聖人、「今も」調のドグマティコン。祝日期間中は3スティヒ
ラを調より、3スティヒラを祝日、4スティヒラを聖人、「栄光は」聖人、「今
も」調のドグマティコン。もし主の小祝日ないし聖母の祝日が主日に当たった
場合には、4スティヒラを復活の調より、6スティヒラを祝日のもの。「栄光
は」「今も」祝日。

c. 週日の晩課（日曜晩課はこれに該当）。聖人のために6スティヒラが定
められた日なら、すべてそこから。もし3スティヒラの日なら、3つは当該週の
調より補う。八調書のスティヒラが聖人のスティヒラに先立つが、金曜なら聖
人が優先される。「栄光は」、聖人（もしあるなら）、「今も」、次いで八調書よ
り「栄光は」の調のもの。ただし金曜は当該週の調のもの。聖人に「ドクサス

ティコン」(「栄光は」の次に来るスティヒラ)がない場合には、「栄光は」「今も」と続け、聖人のスティヒラの後に見出される聖母讃歌。(一部省略)、金曜は調の終わりであるため、当該週の調の「大ドグマティコン」(上記IV①b参照)。

この部分のスティヒラは「〈主よ、あなたに向かって〉」の後のスティヒラ」と呼ばれる。これには計10節より成る「先句」がまず定められており、第10節から以下、歌われる連数に照らして挿入される。この先句は導者が歌う。順に⑩「わが霊を牢獄より引き出したまえ、あなたの名を讃えることができるように」⑨「真理に就く人々がわたしを待つ、あなたがわたしに善き報いを下さるまで」⑧「主よ、深き処よりあなたに向かって叫ぶ。主よ、わが言葉を聞き届けたまえ」⑦「あなたの耳に、わたしの願いの言葉が届きますように」⑥「主よ、もしあなたが罪に目を留められるなら、誰があなたの前に立てようか？しかし恵みはあなたの許にある」⑤「主よ、わたしはあなたの掟のゆえに、あなたに希望を置く。わが霊はあなたの言葉のゆえに請い願う。わが霊は、主により頼む」④「朝の見張りのときから夜更けまで、イスラエルは主により頼む」③「憐れみは主にあり、贖いは主にあって豊か。主はイスラエルをすべての悪から解放される」②「すべての国民は主を讃えよ、すべての民よ、彼を讃えよ」①「主の憐れみはわれらの上に増し、彼の正義はとこしえに留まる」。これに続いて「栄光は」「今も」が加わる。

8月15日は、主日(第2調)かつ大祝日であったため、上記のb「聖母の祝日が主日に当たった場合」に該当し、スティヒラとしては、まず第2調の「復活スティヒラ」(IV①a)より計4連、すなわち①「来たれ、拝もう。父より永遠の昔に生まれ、おとめマリアより肉を受けた御言葉を。この方は自ら十字架の苦しみを受け、埋葬へと自らを委ねたのち、死者たちのうちから復活した。道を見失った者、われらを救いたまえ」。②「キリスト、われらの救い主、あなたはわれらに定められた罪状書きを十字架に釘付けにして無効とし、死の支配を打ち滅ぼした。われらは彼の三日目なる復活を讃える」。③「大天使らよ。われらはキリストの復活を歌う。彼はわれらの霊の贖い主にして救い主。主は大なる栄光を伴い、力を帯びて、再びこの世を、自ら創られたこの世を裁くために来られる」。④「十字架に付けられ、葬られた治め主なるあなたを、天使は婦人たちにこう言って告げ知らせた。〈来て、見るがよい。主が葬られた場所を。主はあらかじめ告げておられたように、力強く復活された〉。それゆえわれらはあなたを、唯一不死なる方として拝む。生命を与えるキリストよ、

われらを憐れみたまえ」を歌った。これに祝日の6連（V）が加わるべきであるが、8月15日前晩には、①「おお、いと高き奇跡！ 生命の泉が墓に置かれ、墓が天への階段となる。ゲトセマニよ、目覚めよ、おとめの聖なる幕屋よ！ われら信徒たちは、大天使ガートルに倣い、このように叫ぶ。〈めでたし、恩寵に満たされた方。主はあなたとともにおられる。あなたを通して世に豊かな恵みをもたらされた主が〉」。②「神の母なるおとめよ、あなたの神秘はいとも不思議なこと。あなたはいと高き方の玉座となり、きょう、大地より天へと挙げられた。あなたの栄光は、神的で天に起源を置く神秘に輝きを放つ。おとめごらよ、あなた方は王の母とともに高みへと挙げられる。〈めでたし、恩寵に満たされた方。主はあなたとともにおられる。あなたを通して世に豊かな恵みをもたらされた主が〉」。③「あなたの崩御を、天使、大天使、玉座、支配、始原、権威、力、ケルブに畏れ多きセラフィムらは讃える。地の子らは、あなたの神的な誉れに喜ぶ。王たちは地にひれ伏し、大天使らは天使らとともにこう歌う。〈めでたし、恩寵に満たされた方。主はあなたとともにおられる。あなたを通して世に豊かな恵みをもたらされた主が〉」の3連のみ用意されているので、6連とするために各々2回ずつ繰り返した。なお司教区聖堂で行われたミクローシュの祝日には、ステイヒラとして8連が定められていたため、先句は⑧より始まった。

そして「栄光は」「今も」を介し、「神の命を受け、誉れある使徒たちは、地のあらゆる果てより、雲の翼に運ばれて」（第1調）、「彼らは、あなたの浄らかなる体へと運ばれ来て、あたかも聖なる亡骸に、崇敬をもって接吻する」（第5調）、「いと高き天の力は、その君侯とともに降り来たる」（第2調）、「いとも聖なるあなたの遺骸は崇敬とともに挙げられ、畏敬をもって涙のうちに天へと運ばれる。彼らは祈りのうちにこう叫ぶ。見よ、王の妃を。神の許婚が到来する」（第6調）、「天は扉を上げ、永遠の光の母を、崇敬とともに迎え入れる」（第3調）、「この王妃を通じて人類すべての救いが叶うがゆえに、われらはこの方に敢えて目を注ぎえず、相応しく讃えることもできない」（第7調）、「この方の高貴さはあらゆる人間の理解を高く超える」（第4調）、「いとも聖なる神の母は、その御子とともに天に住まわれるがゆえに、常にわれらのために祈りたまえ、主があなたの新しき民を、あらゆる敵の試みより救い、守りたまえと」（第8調）、そして最後に「おお染みなき母よ、われらはあなたの庇護を、とこしえに確信する」（第1調）と、全8調に渡って歌われた。ここは通常の主日前晩晩課なら「大ドグマティコン」、週日前晩晩課なら「聖母讃歌」が来

るところである〔IV①b もしくは IV④b〕。

聖母讃歌に関して、司祭用祈禱書1064頁にはこうまとめている。「スティヒラとトロパールの連は、晩課でも朝課でも、テオトキオンすなわち聖母讃歌が閉じる。当該日固有の聖人の栄唱（「栄光は」に続くもの）がない場合、スティヒラの後の聖母讃歌は、最後のスティヒラを歌った調のものを歌う。ただし、土曜の夜には次週の調に移らねばならない。また金曜の夜には「主よ、あなたに」に続くスティヒラの最後に、その週の調を閉ざす意味で当該週の調のものを歌う。

ただ、聖人の栄唱が定められている場合、「栄光は」と「今も」を分かち、「栄光は」に続けて聖人のスティヒラを、「今も」に続けて聖母讃歌を歌うが、その際聖母讃歌の調としては、土曜の「主よ、あなたに」の後には当該週の調のものを、他の場合には必ず聖人の栄唱に合う調のものを、しかし金曜夜には調を閉ざす意味からもう一度当該週の調のものを歌う。

トロパールの後には、「散会聖母讃歌」を歌うが、これは最後のトロパールに合う調のものを歌う。主と聖母の祝日期間には、前祝日から閉じ祝日まで、聖母讃歌に代えて祝日のものを歌う。閉じの聖母讃歌の「調」が、土曜・金曜には当該週の調にしたがって復活のキリストに倣う一方、通常はむしろ聖人の栄唱の調に従い、聖母がわれわれ人間にとって同伴者であることを示している点に注目したい。

この後、司祭は香を振りつつ祭壇を左回りに廻り、イコノスタシスの北門を通過して王門正面に至り、王門と、王門の左右面のイコンに香を振る。その後王門を開け、次のように黙禱する。その黙禱文には、ギリシア教会起源のものとスラヴ教会起源のもの二通りがある。通例ハンガリーのギリシア・カトリック教会では、歴史的沿革に基づき後者に従うが、ダーモーツではローマから出版されているギリシア語版テキストに基づいているため、前者も訳出しておく。まずギリシア語原文によるものは「夕に朝にまた昼に、万物の治め主よ、われらはあなたを讃え、祝し、あなたに感謝を捧げ、あなたにこい願う。われらの祈りが、御顔の前に立ち上る芳香のように、御許へ届きますように。われらの心が、悪しき言葉や思いに傾くことを許したもうな。われらの霊に企みを図るすべてのものからわれらを解放したまえ。おお主よ、主よ、われらの目はあなたに注がれ、われらの希望はあなたのうちにある。われらの神よ、われらを貧しきものとさせたもうな。すべて栄光、崇敬、讃美はあなたにふさわしい。父と子と聖霊よ、今もいつも世々とこしえに。アーメン」。続いてスラヴ語原文

によるものである。「善意に満ち、人を愛するわれらの王よ、あなたはすべてを祝される。われらは悔い改めの心と遜りの霊をもって切にあなたにこい願う。われらの真なる神キリストよ、われらの起居行動を祝したまえ。あなたの到来と昇天、人々との共生は祝される。いにしえより今もいつも世々に。アーメン」。

この後司祭は、王門に向かって十字を切りつつ「あなたの聖なるものの入場は†祝せられる、いにしえより、今もいつも世々とこしえに。アーメン」と静かに唱える。

五. 次いで司祭による「叡智！ 真なる信徒たちよ！」との促しから、晩課における「聖入」が始まり、会衆は「神の穏やかな光、聖にして幸い、不死なる天の父なる神の栄光の輝き、イエス・キリスト！ 太陽のやすらいにまみえ、夕べの光を目にして、われらは父、子、聖霊なる神を祝す。神の子よ、あなたは、われらがいついかなる時にも聖なる声もて歌うにふさわしき方、あなたは世に生命を与える。それゆえにこそ、この世もあなたを讃える」と歌う。

六. 次に司祭は「謹んで聴こう！あなた方すべてに平安あれ！叡智！謹んで聴こう！」と促し、先唱者により「プロキメン」が歌われる。この日は詩篇92篇より、土曜日のための「主は王、宝石の衣に身を包む」が歌われた。これに挿句「主は力を帯び、自らを守る」「彼は大地の回転を確かなものとし、それは揺るがない」「主よ、聖性はあなたの家にこそ相応しい。世々とこしえに」が挿まれ、会衆はそのたびにプロキメンを繰り返す。司教区聖堂では1回の応唱に留められていた。

信徒用祈祷書には、プロキメンだけが挿句なしで記載されている。日曜日は詩篇133篇で、「見よ、あなたがた主のすべての僕は、主を讃えよ」、月曜日は詩篇4篇で「主はわたしの祈りを聞き入れられた、わたしが主に向かって叫んだときに」、火曜日は詩篇22篇で「主よ、あなたの憐れみが、わが生涯のすべての日において、わたしを覆う」。水曜日は詩篇53篇で「神よ、あなたの名においてわたしを自由にしたまえ、そしてあなたの力においてわたしを裁きたまえ」、木曜日は詩篇120篇で「わが救いは主のうちにあり、主は天と地を創られた方」、金曜日は詩篇58篇で「神よ、あなたはわが祭壇、あなたの憐れみはわたしを導く」である。

司祭用祈祷書369頁；「プロキメンの後、特別な祝日ないし大聖人の日であれば、3つのパリミアすなわち旧約聖書の朗読がある。助祭ないし司祭が、各々の朗読の前に〈叡智！〉と述べる」。その「叡智！」に続けて「～書の朗読」「謹んで聴こう！」が各旧約朗読（パリミア）の前に置かれる。8月15日は『創世

記』28. 10-17；『エゼキエル書』43. 72-44. 1；『箴言』9. 1-11であった。

続いて「重連禱」が行われる。この名称は「主よ憐れみたまえ」の句を三度繰り返す部分が挟まれることによる。司祭「われらすべて、まったく心・まったく霊でもって語ろう！」 会衆「主よ憐れみたまえ」（以下司祭の各導句に続ける） 司祭「われらが全能の主、われらの師父たちの神、われらはあなたに祈る、われらに耳を傾け憐れみたまえ」 「神よ、あなたの大いなる憐れみによって、われらを憐れみたまえ。われらはあなたに願う、われらに耳を傾けわれらを憐れみたまえ」 会衆「主よ憐れみたまえ（×3）」（以下司祭の各導句に続ける） 司祭「さらに、神を愛するわれらの司教～のため、われらの霊的父のため、そしてキリストにおけるあらゆるわれらの兄弟たちのために願おう」 「さらに、ここに集いあなたから大いなる豊かな恵みを待ち望む民のため、われらの恩人のため、また真なる信仰をもつすべてのキリスト教徒のため、主に願おう」 「あなたは憐れみ深く人を愛する神、父と子と聖霊よ、われらはあなたを讃える、今もいつも世々とこしえに」 会衆「アーメン」。

七. 次に会衆の歌が続く（第4調）。「われらの主よ、この夜あらゆる罪からわれらが自らを守れるよう、導きたまえ。われらの主よ、あなたは祝された方、われらが父祖たちの神よ、あなたの名はとこしえに誉れと栄光に満ち、アーメン。主よ、われらがあなたに信を置くとき、あなたの恵みがわれらの上にありますように。われらの主よ、あなたは祝された方、あなたの真理に向け、われらを諭したまえ。創造主よ、あなたは祝された方、あなたの真理に向け、われらを教えたまえ。聖なる方よ、あなたは祝された方、あなたの真理をもってわれらを照らしたまえ。主よ、あなたの恵みは永遠、あなたの御手の業を取り去りたもうな。賛美はあなたにふさわしい、歌はあなたににわかしい。栄光はあなたに適わしい、父と子と聖霊よ、今もいつも世々とこしえに。アーメン」。

司祭により説教が行われる場合には、ここに挿入される。

続いて「完遂連禱」が行われる。司祭「われらの夕べの願いを、主に向けてまっとうしよう」 会衆「主よ憐れみたまえ」（以下司祭の各導句に続ける）

司祭「神よ、あなたの憐れみによって、われらを守り、救い、憐れみ、強めたまえ」 「この夜を通して、完徳のうちに、聖性ととともに、平安に罪なく過ごせるよう、主に求めよう」 会衆「主よ叶えたまえ」（以下同様に） 司祭「平和の天使、信篤き導き手、われらの霊と肉の守り手を、主に求めよう」 「われらの罪と過ちへの、赦しと寛容を主に求めよう」 「われらの霊に善と

益を、世には平和を主に求めよう」 「われらの生の残りの期間を平安と痛悔のうちに過ごすことができるよう、主に求めよう」 「われらの生を、キリスト教徒としてのあり方で苦悩と恥なく送れるよう、そしてキリストの畏れ多き裁きの座の前で、善き答えができるよう、主に求めよう」 「いと聖にして浄らか、いとも祝せられし栄えあるわれらの王妃、神の母にして常に処女なるマリアを、すべての聖人とともに思い起こしつつ、われら自身とお互いを、そしてわれらの生命すべてを、われらの神なるキリストに獻げよう」 会衆「主よ、あなたに」 司祭「あなたは善意に満ち人を愛する神、われらはあなたを讃える。父と子と聖霊よ、今もいつも世々とこしえに」 会衆「アーメン」。

司祭（会衆の側に顔を向け祝福を与える）「あなたがたすべてに平安があるように」 会衆「あなたの霊にも」 司祭「主に頭を垂れよう」 会衆「主よ、あなたに」 司祭の黙祷「われらの神なる主よ、あなたは天を円形にし、人間の、いまだ救いのないこの世に降りてこられた。あなたの僕と嗣業に目を注ぎたまえ。あなたの僕らは、畏れ多く人を愛する裁き手なるあなたに、そのこうべを垂れ、あなたの前に身を低くする。わたしは人々から救いを求めるのではなく、あなたの恵みに信頼して、あなたの救いを待ち望む。この夕べ、近づくる夜を通して、彼らをすべての敵、悪魔の危険なる罟、空しき思いなし、あらゆる悪しき記憶から、いついかなる時にも守りたまえ」。 司祭は声を挙げる。「あなたの王国の支配が祝せられ、讃えられますように、父と子と聖霊よ、今もいつも世々とこしえに」 会衆「アーメン」。

— . —

十(その1). 8月15日は祝日前晩でもあったため、「リティアのスティヒラ」がここに挿入された(V)。(第1調)「御言葉の証人、その僕たちは、御言葉の母の肉なる葬りをも目にせねばならなかった。救い主の昇天のみならず、その母の被昇天の証人ともなるために。それゆえ地のあらゆる果てより集い来たりて、彼らはシオンに到り、挙げられるおとめのために最後の礼を捧げた。この母をわれらもまた、使徒たちとともに、畏敬の念とともに崇めよう。母はわれらの霊の救いのために祈ってくださる」。(第2調)「天より高く、ケルビムよりも栄光に満ちた方、いかなる被造物よりも敬愛に値する方、言葉に尽くせぬ清さのうちに宿り、永遠の聖性を懐胎するに相応しき者とされた方。その方はきょう、神の御子の手にその聖なる霊を委ねる。この方を通して万物は喜びに満たされ、われらには豊かな恩寵が与えられる」。続いて(第2調)「あらゆる咎なき花嫁、父の善き喜びの母、神により神自らが混同なく一つになるため

の住まいとして定められた方。この方はきょう、その染みなき霊を、創り主なる神に委ねる。目に見えぬ力は神に相応しき仕方であらう。彼女を抱き取り、真に生命の母なる方、近づきがたき光の灯、信篤き者たちの救い、われらの魂の希望は、生命へと渡される。」「栄光は」。(第5調)「来たれ、寿ぎの集いよ、来たれ、われらは歌隊を作ろう。そしてこの聖なる幕屋で、神の母の栄光に満ちた逝去を歌をもってほめたたえよう。きょう、天の広間が開き、いかなるものも自らのうちに容れることのできなかつた方の母を迎え入れる。生命を与える泉の母はきょう、地上に留まる信徒たちに別れの挨拶をし、この世を去るおとめの頬には天の微笑が漂う。天使は使徒たちとともに歌を歌い、地上の生命から天での命に移されるさまを喜びのうちに見る。それゆえわれらもまた、皆そろってその前に敬意を表し、彼女にこう願う。〈おおキリストを信ずる者の母よ、愛するあなたの子供たち、信のうちにあなたの聖なる逝去を寿ぐ者たちのことを忘れたもうな〉。」「今も」。(第5調)「民よ、われらの神の母に向けて歌を捧げよ。歌を捧げよ。きょう彼女は、自らのいとも聖なる霊を、彼女から肉を受けた御子の神的な手へと委ねる。どうかその主に向けて止むことなく祈りたまえ、世に平和と豊かな恵みを注ぎたまえと」。

司祭用祈祷書378頁。—— 「大祝日前晩の晩課では、完遂連禱ののち、会衆はリティアを歌う。その歌唱の間、司祭は祭壇と聖堂全体に香を振り、最後に補助者とともに、聖堂中央付近に置かれた卓の前に進み出る。卓上の2本のろうそくの間には十字架が置かれ、その前には台座に置かれた5つのパン（プロスフォラ）、左側には特製の器に入れたぶどう酒、右側には小麦、その前、十字架と対称の位置にはオリーブ油が置かれる。司祭はこれらにも香を振る。歌唱が終わると助祭ないし司祭はリティア卓（テトラポド）の前で「リティアの連禱」を歌う」——。

司祭による長い祈祷文が続く。①「神よ、あなたの民、あなたの嗣業を祝福したまえ。あなたの世界を恵みと慈しみをもって顧み、真なる信持つキリスト教の力を増し高めたまえ。われらのいとも聖なる王妃よ、われらの許にあなたの溢れる恩寵を送りたまえ。神の母にして常世に処女なるマリアの執り成しを通じ、あなたの生命を与える尊き十字架の力によって、崇敬に値し目に見えぬ点の諸力の祭壇を通して、浄らかにして誉れある預言者・先駆者たる洗礼者ヨハネ、聖にして輝かしく、あらゆる誉れに値する使徒たち、聖なるわれらの師父たち、全教会の偉大なる教師たちと司教たち、すなわち大バジル、神学者グレゴリオス、金口のヨハネ、アタナシオスにキュリロス、リュキア・ミュラの

大司教にして奇跡行者の聖ミクローシュわれらの師父、聖にして勝利をおさめた殉教者たち、聖なる生涯を送り神の息吹を受けたわれらの師父たち、聖にして真実、神的なる古の人々、ヨアキムとアンナ、聖なる生涯を送り神の息吹を受けたわれらの師父たち、洞窟の隠修士アントニオスとテオドシオス（注；5月3日が記念日、キエフ洞窟修道院）、今日われらとその記念を行う聖～、それにあなたのすべての聖人たちの執り成しを通じ、大いに憐れみ深きわれらの主よ、われらはあなたにこいねがう、われら、あなたに向かいて祈り求める罪びとたちの祈りを聞き入れ、われらを憐れみたまえ」。会衆「主よ、憐れみたまえ」（×3） ②司祭「神を愛するわれらの司教N、われらの霊的師父のために、またキリストにおけるわれらの兄弟たちのために、またあらゆる神の恩寵を必要とし、悩み心配するキリスト教徒の霊のために、この場所とそこに住む人々が守られるように、全世界の平和と平穩、神の聖なる教会の繁栄のため、熱意と神への畏れもて尽力し仕えるわれらの師父たち・兄弟たちの救いと助けのため、使者たちと孤独のうちに生きる者たちのため、病いに横たわる者たちの快癒のため、囚われ人たちの解放のため、しもべとして生きるわれらの兄弟たちのため、この聖なる幕屋で仕えるまた仕えた者たちすべてのために、われらはみなともに祈ろう」。会衆「主よ、憐れみたまえ」（×3） ③司祭「この場所、あらゆる町、共同体、村を、神が、飢えや不慮の死、地震、火事、戦争、外敵の侵入そしてあらゆる内乱から守られるよう、ともに祈ろう。そして善き方にして人を愛する神が、われらに対して憐れみ深く、善き意向を持ち、和解を旨とし、またわれらに抗して起こるあらゆる怒りを取り除いて下さるよう、祈ろう。そしてわれらには厳しき真理の懲罰からわれらを救い、われらを憐れみたまえ」。会衆「主よ、憐れみたまえ」（×3） ④司祭「主なる神が、罪深き僕らの執り成しの言葉を聞き入れ、われらを憐れんでくださるように」 会衆「主よ、憐れみたまえ」（×3） ⑤司祭「神よ、われらの救い手よ、大地の球のあらゆる境また遠き海にいる者たちの希望よ、われらを聞き届けたまえ。憐れみ深きわれらの主よ、われら罪びとらに憐れみを垂れ、われらを憐れみたまえ。あなたは恵み深く人を愛する神、われらはあなたを讃える、父と子と聖霊よ、今もいつも世々としえに」。会衆「アーメン」。

次いで司祭は会衆の側に顔を向ける。「あなたがたすべてに平安があるように」 会衆「あなたの霊にも」 司祭「主に頭を垂れよう」 会衆「主よ、あなたに」 次いで司祭の「頭を垂れての祈り」が続く。⑥「大いに憐れみ深き治め主なるイエス・キリスト、われらの神、またわれらのいと聖なる王妃、

神の母にして常世に処女なるマリアの執り成しを通じ、あなたの生命を与える尊き十字架の力によって、崇敬に値し目に見えぬ点の諸力の祭壇を通して、浄らかにして誉れある預言者・先駆者たる洗礼者ヨハネ、聖にして輝かしく、あらゆる誉れに値する使徒たち、聖なるわれらの師父たち、全教会の偉大なる教師たちと司教たち、すなわち大バジル、神学者グレゴリオス、金口のヨハネ、アタナシオスにキュリロス、リュキア・ミュラの司教にして奇跡行者の聖ミクローシュわれらの師父、聖にして勝利をおさめた殉教者たち、聖なる生涯を送り神の息吹を受けたわれらの師父たち、聖にして真実、神的なる古の人々、ヨアキムとアンナ、聖なる生涯を送り神の息吹を受けたわれらの師父たち、洞窟の隠修士アントニオスとテオドシオス、今日われらがその記念を行う聖へ、それにあなたのすべての聖人たちの執り成しを通じ、大いに憐れみ深きわれらの主よ、恵み深くわれらの祈りを聞き入れ、われらに罪の赦しを与え、あなたの翼のかけをもって覆い、われらからあらゆる敵意と戦いとを遠ざけ、われらとあなたの全世界を憐れみ、われらの霊を救いたまえ。あなたは善き方にして人を愛する方なれば」。会衆がそれに「アーメン」と呼応して「リティア」は終わり、いったん通常の晩課部分に戻る。

—— ・ ——

八. ここに「先句スティヒラ」が続く。これは、先に会衆の歌う歌（スティヒラ）が先行し、それに先唱者の「挿句」が続くという形式を取る。挿句は、主日前晩課であっても「土曜日」のものとして司祭用祈祷書に定められているものを用いる。それは①「主は王、宝石の衣に身を包む」、②「主は大地の回転を確かなものとし、それは揺らぐことがない」、③「主よ、聖性はあなたの家にこそ相応しい。世々とこしえに」である。これに「栄光は」「今も」が加わる。

スティヒラとしては、8月15日にも「八調書」より取られた。第2調①「あなたの復活を通して、われらの救い主なるキリストよ、あなたは万物に光をもたらし、あなたの被造物を呼び戻された。万能の主よ、あなたに栄光」。②「あなたは自らの十字架を通して、樂園の果実の樹に由来する呪いを絶えさせ、自らの墓を通じて死の支配を止めさせ、自らの復活を通して人類に光をもたらした。それ故われらはあなたに向かって叫ぶ。〈キリスト、善性に満ちたわれらの神よ、あなたに栄光！〉」。③「救い主よ、あなたは十字架に掛けられることで、人の心の善性を変容させた。兵士らの非人間性を証しつつ、あなたは槍によって自らのわき腹を開かせたからである。ユダヤ人たちはあなたの力を知る

ことなく、あなたはその憐れみ深さを通して、自らに対する埋葬を受け入れ、三日目に復活した。主よ、あなたに栄光!」。④「生命の与え主キリストよ、あなたは死すべき者たちへの厚意ゆえに、自らの意志により死を蒙り、力ある者として黄泉に降られた。そこではあなたの到来を待ち望んでいた者たちを、野獣の爪の間より解放し、彼らに対して黄泉に代えて楽園を賜った。それゆえ、あなたの三日目の復活を寿ぐわれらにも、罪の赦しと豊かな恵みを与えたまえ」。

「今も」に続き、「先句スティヒラ用の聖母讃歌」が歌われる。この部分は通常なら、当該調⇒「栄光は」⇒祝日⇒「今も」⇒先行調を受けた小ドグマティコンとなる。すなわち、IV①d = VIIIイ または IV④d である。

この日は「栄光は」「今も」に続いて祝日のものが用いられた(V)。(第4調)「神の母なるおとめよ、あなたはこの世の生命に別れを告げ、あなたの産んだ神の御子の許へと移された。そこに居合わせたのは、主の兄弟にしてエルサレムの司教なる使徒ヤコブ、使徒の長なるペトロ、そして全使徒団。彼らは公なる信の告白とともに、われらの神キリストによる計らいの恐れ多き神秘を歌いつつ、あなたのいとも聖なる体を感じ銘のうちに埋葬した。しかし上なる天では、誉れ高き天使の群れが、この奇跡に驚きつつ、互いにこう語り合う。〈あなた方は框を挙げ、天と地の創り主の母を迎えよ。その栄光を歌いつつ、浄らかで聖なるその体を讃えよ。その中で、われらの見えざる主は目に見える方となった〉。地に住む者らよ、われらもまた、きょうこの日、誉れを受けた染みなきおとめに願おう。〈キリストの教えの力を増し高め、われらの霊の救いのために祈りたまえ〉と」。

なお挿句としては、司教用祈祷書では他に「金曜日以外のためのもの」「金曜日のもの」が定められているが、信徒用祈祷書では前者を「土曜日以外のための」としている。それは詩篇122編からのもので、①「わたしはあなたに向かってわが両の目を挙げる。あなたは天に住まわれる。見よ、僕の目が主人の手に、女僕の目が女主人の手に注がれるように、わが両の目はわれらの主に、われらの神に注がれる。あなたがわれらを憐れまれるまで」。②「主よ、われらを憐れみたまえ。われらを憐れみたまえ。われらは本当に、恥に覆われている。われらの霊は、富める者らの恥に、傲慢な者らの嘲りに覆われている」。挿句としては、これらのいずれも後半部が声を出して発語されることでその役割を果たす。「栄光は」に続き、当日の聖人のスティヒラが来て、「今も」を介して聖母讃歌である。

九. スティヒラの後には、「聖シメオンの歌」が静謐なメロディーで歌われる。「主よ、あなたはいま、御言葉にしたがって平安のうちに僕を務めから解いて下さる。わが両の眼は、あなたがすべての民の目の前に遣わされた救い主の姿を見た。異邦人の啓蒙のための光として、またあなたの民イスラエルには栄光を帯びた姿で来られた方を」。

続いて「聖なる神」(×3)、「栄光は」「今も」に続き、「聖三位一体よ、われらを憐れみたまえ。われらの主よ、われらを罪から浄めたまえ。創造主よ、われらの罪を赦したまえ。聖なる者よ、われらを顧み、あなたの名によってわれらの病を癒したまえ」「主よ、憐れみたまえ」(×3)「栄光は」「今も」、「主の祈り」に続き、司祭「国と力と栄光は、父と子と聖霊よ、あなたのもの、今もいつも世々とこしえに」 会衆「アーメン」と唱えられる。

司祭用祈祷書375-6頁；「土曜日には、当該調の復活トロパール、第1聖人、「栄光は」第2聖人、「今も」その調にふさわしい復活聖母讃歌。もし聖人が一人なら、「栄光は」当日の聖人。聖人にトロパールがない場合、「栄光は」「今も」に当該調の復活聖母讃歌。週日には、もし大聖人の記念を行う場合には、「栄光は」「今も」その調にふさわしい復活聖母讃歌(土曜日と同様)。他の週日には、聖人のトロパール、「栄光は」「今も」その調にふさわしい聖母讃歌。もし聖人が二人いる場合には、(第1聖人のトロパール)「栄光は」第2聖人のトロパール、「今も」その調にふさわしい聖母讃歌。もし聖人にトロパールがない場合には、当該曜日の次第で執り行う。祝日期間中は、もし別のトロパールがなければ、祝日のものを一度だけ。そうでなければ、前祝日ないし祝日のトロパールを聖母讃歌に代える。大晩課の際には、トロパールの後直ちに「叡智！」そして大散会定式。もしリティアがあるなら、シメオンの歌、聖なる神、主の祈りののちトロパールを司祭が始める。トロパールの後、週日の晩課では重連禱」。

8月15日には、祝日のトロパール(第1調)「あなたはその出産において処女性を保ち、その死においては世を捨て去ることがなかった。なぜなら生命の母であり続け、生命へと移され、その祈りを通してわれらの霊を永遠の死より救われた」が3度繰り返して歌われた。司祭用祈祷書382頁には「もし主もしくは聖母の祝日であれば、このトロパールを司祭が一度、会衆が二度歌う。週日の祝日であれば、会衆は一度繰り返す」という規定があり、これに従うものである。

十（その2）. この後「リティア」に戻る。まず司祭「主に願おう」 会衆「主よ憐れみたまえ」 司祭「主にしてわれらの神なるイエス・キリスト、あなたは5つのパンを祝福し、それによって5千人を満たされた」。

司祭用祈祷書383頁；「司祭はパンの一つを手に取り、接吻してから、祝福を受ける供え物にそのパンで十字を切り、もう一度接吻して元の位置に戻す。その間に祈りを続ける」。司祭「神なるわれらの創造主、あなたが自らこのパンと(†)、小麦と(†)、ぶどう酒と(†)、オリーブとを(†)、祝福したまえ。この共同体（町）、そして全世界において、これらすべてのものを増やし、これらを味わう信徒たちを聖化したまえ。われらの神キリスト、あなたはすべてを祝福し聖化する方。われらは始めなきあなたの父、いとも聖なる善き方にして生命の創造者なるあなたの霊とともに、あなたに讃歌を歌う。今もいつも世々としえに」 会衆「アーメン」 —— 司祭は供え物に再度香を振り、その間にトロパール第4調の節で「主の名は今よりとしえに至るまで讃えられよ」と歌う。同じ句を会衆は2度繰り返して歌う ——。

続いて詩篇第33編の前半部分（第11節まで）を速読する。その後、司祭「主の祝福が、その恵みと人への愛とともにあなた方にありますように。今もいつも世々としえに」 会衆「アーメン」。

以上で、ダーモーツ修道院でおこなわれた2004年8月15日前晩のリティア付き晩課は終わり、直後に朝課が続いた。ミクローシュの祝日に司教座聖堂で行われた同様の晩課では、詩篇の速読を省き、「大散会定式」が次のように続いた。 司祭「叡智！」 会衆「祝福を与えたまえ」 司祭「キリスト、われらの神がとしえに祝せられ、讃えられますように」 会衆「神よ、真の普遍的信仰を、世々としえに力づけたまえ」 司祭「いとも聖なる神の母よ、われらを救いたまえ」 会衆「ケルビムよりも尊く、セラフィムよりも類いようもなく栄えある方、あなたは神を、御言葉を、陣痛なくお産みになった。真なる神の母よ、われらはあなたを誉め歌う」 司祭「あなたに栄光あれ、キリスト・われらの神よ、われらの希望よ、あなたに栄光あれ」 会衆「栄光は」「今も」「主よ、憐れみたまえ」(×3)「主よ、祝福を与えたまえ」 司祭「キリスト、真なるわれらの神よ、…聖母の祈りを通じ、また聖にして栄光に満ちすべてを越えて誉れある使徒たちと、すべての聖人のとりなしを通じて、善意に満ち人を愛する方として、われらを憐れみ救いたまえ」。 会衆「アーメン」 司祭「主の祝福が、その恵みと人への愛とともにあなた方にありますように。今も

いつも世々とこしえに」。会衆「アーメン」。司教座聖堂では、主・祝日の「前晩晩課」と「主・祝日朝課」は、信徒の生活を考えて分割されている。

4. 2004年8月15日(日)「聖母の御眠り」主祝日朝課

次の朝課の次第に移ろう。晩課と同様、便宜的に、司教区用祈祷書Ⅰ1)で冠した漢数字による項区分番号を用いることにする。司教区聖堂では主日祝日を対象として祈祷書が編まれているが、修道院典礼を視野に入れるなら、当然週日の朝課も考慮される。この点、晩課が主日前晩晩課と主日晩課とで、主日性と週日性をカバーできていたのとは次第が異なる。

まず、8月15日は聖母の祝日であり、リティア付き晩課に続けて朝課が深夜に行われた。司祭用祈祷書99頁；「リティアの祝日および受難節中には、朝課は以下の部分より始まる」。ただし慣例的に、セミナーリウムでの土曜朝課も以下より始まっていた。

一、まず司祭の句「聖にして一、生命を与え分かれざる三位一体に、父と子と聖霊とに、変わることなく、今もいつも世々とこしえに栄光あれ」に続き、会衆が応ずる。会衆「アーメン。いと高きところには神に栄光、地には平和、人には慈愛あれ。いと高きところには神に栄光、地には平和、人には慈愛あれ。いと高きところには神に栄光、地には平和、人には慈愛あれ。主よ、わが唇を開きたまえ、わが口はあなたの誉れを告げよう。主よ、わが唇を開きたまえ、わが口はあなたの誉れを告げよう」。

二、続いてヘクサプサルモス(「6つの詩篇」の意；詩篇第3, 37, 62, 87, 102〔1-14; 15-22〕, 142編)が会衆により歌われる。途中の62編が終わったところで「栄光は」「今も」「アレルヤ×3, 神よ, 栄光はあなたに」(×3)「主よ憐れみたまえ」(×3)「栄光は」「今も」を介し、後半3編に移る。終わりは「栄光は」「今も」「アレルヤ×3, 神よ, 栄光はあなたに」(×3)。ただし司教区聖堂では主日祝日を問わず第3編に限定され、祈祷書の記載もこれを反映している。セミナーリウムの土曜朝課では、土曜のために(上記のように七番めに)割り振られた142編が唱えられている。

次いで大連祷。これに関しては上記「晩課」二.を参照。

これにつづき、司祭の「主は神、われらを照らす方。主の名によりて来たる者は讃えられんことを」との促しがある。それに続き、会衆はこの句を二度繰り返して歌う(ダーモーツでは一度)。これは当日これにつづくトロパール(Ⅳ

②a) の調にあわせて歌われる。

これに次いで速読される先句は①「主に感謝を捧げよ。主は善き方。その憐れみは永遠」②「すべての民がわたしを取り囲む。だがわたしは主の名において彼らに報いる」③「これは主より来たること、われらの目の前にこれは不思議なわざ」。各々の後に「主は神、われらを照らす方」が繰り返される。

続いて主日にはふつう「トロパール」が2つ、続いて「復活散会聖母讃歌」が歌われる。司祭用祈祷書109頁；「主日には、まず当日の調に基づく「復活トロパール」を2度、「栄光は」、「聖人のトロパール」、「今も」、その聖人トロパールの調に相応しい調の「復活散会聖母讃歌」、後祝日には祝日のトロパール。もし聖人が二人いる場合には、「復活トロパール」は1度、第1聖人、「栄光は」、第2聖人、「今も」、その聖人トロパールの調に相応しい調の「復活散会聖母讃歌」、もしくは祝日トロパール。週日には、もし聖人が二人いる場合には第1聖人のトロパールから始め、「栄光は」、第2聖人、「今も」、その聖人トロパールの調に相応しい調の「散会聖母讃歌」。もし聖人が一人なら、その聖人のトロパール、「栄光は」「今も」、その聖人トロパールの調に相応しい調の「散会聖母讃歌」。ここで歌われる聖母讃歌はⅧアないしⅧウである。主日にここで用いられる「復活散会聖母讃歌」は、土曜晩課で用いられるものと同じであり、主日にはこの位置にこの讃歌を用いて復活の壽ぎを新たにしていると考えられよう。

8月15日朝は、まず「復活トロパール」(第2調, IV①e = IV②a)「死すことなき生命よ、あなたは死にまで身をへりくだらせ、神の光のうちに黄泉を打ち砕いた。そして死者たちをもその深みより復活させた。あらゆる天の力は喜んでこう叫ぶ、〈われらの神、生命の与え主なるキリスト、あなたに栄光〉」。「栄光は」。再度「死すことなき生命よ、あなたは死にまで身をへりくだらせ、神の光のうちに黄泉を打ち砕いた。そして死者たちをもその深みより復活させた。あらゆる天の力は喜んでこう叫ぶ。〈われらの神、生命の与え主なるキリスト、あなたに栄光〉」。「今も」(第1調)。「祝日トロパール」(V)「あなたはその出産において処女性を保ち、その死においては世を捨て去ることがなかった。なぜなら生命の母であり続け、生命へと移され、その祈りを通してわれらの霊を永遠の死より救われた」。

続いて「カティズマ」である。その次第は「晩課」に記したとおりであり、主日朝のカティズマは、第2と第3である。まず「カティズマ」第1部=第2カティズマすなわち②9-16(9-10; 11-13; 14-16)を速読みした。当該カテ

イズマに対応するかたちで「章句」が3個分用意されており、セミナーリウムでは「カティズマ」を読むのを省略し、この章句を読んでいた。その縮めは「カティズマ」の場合と同様である。

司祭用祈祷書110頁；「トロパールの後、会衆は一致して、しかし歌うのではなく「主よ憐れみたまえ」(×3)、「栄光は」「今も」と唱える。その後カティズマ第1アンティフォンを読む。その末尾に「栄光は」「今も」「アレルヤ(×3)、「主よ、栄光はあなたに」(×3)、「主よ憐れみたまえ」×3、「栄光は」「今も」と唱和する。続いて第2アンティフォン、同様に第3アンティフォンを読む」。

続いて小連祷である。司祭「繰り返して平安のうちに主に願おう」 会衆「主よ、憐れみたまえ」(以下司祭の各導句に続ける) 司祭「神よ、あなたの憐れみによって、われらを守り、救い、憐れみ、強めたまえ」 司祭「いとも聖にして浄らか、いとも祝せられし栄えあるわれらの王妃、神の母にして常に処女なるマリアを、すべての聖人とともに思い起こしつつ、われら自身とお互いを、そしてわれらの生命すべてを、われらの神なるキリストに献げよう」 会衆「主よ、あなたに」 司祭「権威、国、力そして栄光は、今もいつも世々とこしえに」 会衆「アーメン」。

次いで第1「カティズマリーオン」である(IV②b)。8月15日はまず復活の寿ぎで、当該調より(第2調)「神を畏れるヨーゼフは、あなたのいとも浄らかなる遺骸を十字架の木より降ろし、浄らかな亜麻布にくるみ、相応しき副葬品を添えて、新しき墓におさめる。しかし主よ、あなたは三日目に復活された、世に豊かな恵みを与えつつ。」「栄光は」,「あなたは、墓石の封印を禁じることなく、それによって信の柱石を建て、われらすべてに新たな生命を与えた。主よ、あなたに栄光あれ」(IV②c)。 「今も」, 祝日のもの(V, 第4調)「ダヴィドよ、われらに告げよ。きょう、われらの祝日はいかなるものか。ダヴィドは答える、〈『詩篇』の書において、神の子の少女について、またおとめについてわたしが歌ったように、彼女から染みなく生まれたキリストが、その彼女をいと高きところにある幕屋に移された。それゆえ母たち、娘たち、そしてキリストの婚約者たちはこう叫んで喜ぶ。〈いと高き王国へと移されたあなたは、祝された方!〉」。通常の主日ならここに復活の聖母讃歌が来る(IV②d)。

続いて「カティズマ」第2部、すなわち第3カティズマ③17-23(17; 18-20; 21-23)が速読される。末尾は「カティズマ」第1部の場合と同様である。

その後再び小連祷。司祭の結句のみ「あなたは善に満ち、人を愛する神、われらはあなたを讃える、父と子と聖霊よ、今もいつも世々とこしえに」とやや異なる。「アーメン」。

続いて第2「カティズマーリオン」である(IV②e)。やはりまず当該調より(第2調)「油を携える女性たちの前で、墓に現れた天使は、次のように語る。(香油は死者にこそ相応しい。キリストは腐敗とは無縁に留まる)。しかしあなた方はこう叫ぶ。(主は復活された。世界に豊かな恵みを賜って)。「栄光は」、「あなたの弟子たちの一群は、香油を携える女性たちと声を合わせて喜ぶ。彼らはあなたの復活を栄光と崇敬のため、われらとともに共通の祝賀を寿ぐ。それゆえ、人を愛するわれらの主よ、われらはあなたに向かってこう叫ぶ。(あなたの民に、あなたの大いなる恵みを与えたまえ!)」(IV②f)。「今も」、祝日のもの(V、第1調)「使徒たちの、崇敬に相応しき一群は、不思議な仕方一つに集った。それは、いとも誉れある神の母よ、あなたはいとも栄光ある方、あなたの浄らかなる亡骸を、彼らが埋葬するためである。彼らとともに、群れなす天使らもまた、あなたの清らかなる埋葬を讃えつつ、彼らとともに歌を奏でる。その記憶を、きょうこの日、われらが信をもって寿ぐ」。こども、通常なら当該調のものである(IV②g)。

三、この後「多憐歌」である。ダーモーツでは詩篇134篇、135編の全編にわたり歌っていた。ここではA)の記載分のみ挙げておく。すなわち①「主の名を讃えよ、アレルヤ。しもべらよ、主を讃えよ」。②「あなたがた、主の家に、われらの神の家の柱廊に立つ者たちよ!。(アレルヤ)」。③「主よ、あなたの名は永遠。主よ、あなたへの記憶は諸国の民から民に及ぶ。(アレルヤ)」。④「シオンより出でたる主は讃えられよ。イエルサレムに住む者らよ。(アレルヤ)」。⑤「主に感謝を捧げよ。主は善き方、(アレルヤ)、主の憐れみは永遠!」。⑥「主は水を越えて大地を確かなものとされた。(アレルヤ)。主の憐れみは永遠!」。⑦「主はエジプトを、その初子もろともに撃たれた。(アレルヤ)。主の憐れみは永遠!」。⑧「主はファラオとその軍の力を、紅海に投げ込まれた。(アレルヤ)。主の憐れみは永遠!」。⑨「われらの謙遜において、主はわれらを想い起こされる。(アレルヤ)。主の憐れみは永遠!」。⑩「そして主はわれらを敵の手より救い出された。(アレルヤ)。主の憐れみは永遠!」。⑪「天の神に感謝を捧げよ。(アレルヤ)。主の憐れみは永遠!」と唱和される。

続いて「多憐歌の後・祝日讃歌」である。これは祝日に固有の歌である。ダーモーツでは「われらの神キリストの染みなき母よ、われらはあなたを讃え、あ

なたの栄えある御眠りを讃える」。挿句①「全地よ、主にあって喜べ。その名に誉れを語れ。栄光へと讃辞をなすがよい」②「神の町は、あなたからの誉れあるわざの証し」③「いと高き方は、その幕屋を聖なるものとされた」④「主よ、あなたの憩いの場に立ちたまえ。あなたとあなたの聖性の場は」⑤「あなたの家には聖性が相応しい。主よ、永遠にいたるまで」⑥「わたしはあなたの名を、民のすべてに及んで思い起こす」「栄光は」「今も」。この間と後に「われらの神キリストの染みなき母よ、われらはあなたを讃え、あなたの栄えある御眠りを讃える」が挿入される。

四. 主日には続いて「復活讃歌」が歌われる。これは「主よ、あなたは祝された方、あなたの真理へとわたしを教え諭したまえ」を先句とする。①「天使らの集いは、驚きに立ち尽くす。われらの救い主なるあなたが、死者のうちに数えられていたのに、死の力を打ち碎き、アダムをも自らとともに助け起こし、黄泉からすべての者を解放したのを目にして」。②「おお弟子たちよ、なにゆえあなた方は高価な香油を虚しい涙に混ぜるのか。墓に現れた天使は、香油を携える女性たちにこう告げた。〈空の墓を見て、救い主が墓から復活したということを理解せよ〉と」。③「朝早く、香油を携える女性たちは、泣きながらあなたの墓へと急ぐ。しかし彼女たちの前に天使が立ち、喜びのうちにこう語る。〈嘆きの時は過ぎ去った。泣くのではない。むしろ復活を弟子たちに告げよ〉」。④「香油を携える女性たちは、われらの救い主よ、あなたの墓にやって来て泣いていた。しかし天使が彼女たちに向かってこう告げた。〈生ける方をなぜ死者たちの間に探すのか。あの方は神として、墓より復活した〉。「栄光は」「われらは、父と子と聖霊に、一なる聖三位一体に祈り、セラフィムとともに声を挙げる。〈主よ、あなたは聖、聖、聖なる方！〉」「今も」「おおおとめよ、あなたは生命の与え主を産み、アダムを罪から清め、エヴァには痛みの代わりに喜びを授けた。生命を失った者たちは、あなたから肉を受けた真の神人が、ふたたび生に値するものとした。「アレルヤ、アレルヤ、アレルヤ！ 主よ、栄光はあなたに」

続いて小連祷。結句のみ「いとも貴く高きあなたの名は、いとも聖とされ讃えられる、父と子と聖霊よ、今もいつも世々とこしえに」と異なっている。「アーメン」。

司祭用祈祷書115頁；「小連祷の後、通例の主日であれば、当該調のイパーコイを歌い、その後昇階唱を読む。その後プロキメンである。祝日と大聖人の日には第3カティズマーリオンが、その後昇階唱が歌われる」。

8月15日には、香油を携えて墓に向かう女たちを主題とする「イパーコイ」は、復活の調のものが速読された（Ⅳ②h）。「受難ののち、われらの神キリストよ、婦人たちはあなたの遺骸に香油を塗ろうと墓に向かった。すると墓に天使の姿を見て恐れおののいた。天使からは彼女たちの上にこんな言葉が響いた。〈主は復活した。世に大いなる恵みを授けて〉」。

次いで8月15日には、第3「カティズマーリオン」がここに来た。これは祝日固有である（Ⅴ）。8月15日は（第3調）「あなたは生まれの時には染みなき懐妊、逝去にあっては腐敗なき死。神の母よ、奇跡が奇跡において一つに溶け合った。なぜなら男を知らぬおとめとして、あなたはその浄らかなる体に胚を育み、神の母としては、死者のための貴き香油で葬られた。それゆえにわれらも天使らとともにあなたに歌を捧げる。〈恩寵に満たされた方よ、あなたは祝された方！〉」。

司祭用祈祷書116頁；「もし祝日が主日に重なり、復活の記念が先立つ場合には、小連祷のあと、まず当該調のイパーコイを歌い、その後祝日ないし聖人のカティズマーリオンを（すべて）、聖母讃歌を除き先句なしで歌う。最後にのみ「栄光は」をはさみ、最後の聖母讃歌（これは決して省略しない）の前に「今も」を入れる。これらののち当該調の昇階唱が読まれる」。

五. ここに「昇階唱」が挿入される。ハンガリーのギリシア・カトリック教会では、司教区聖堂レベルでは第4調のもののみが残っており、これが唱和される。「わが若き頃より、幾多の悪しき感情がわたしを捕らえてきた。しかしわが救い主よ、あなた自身がわたしを守り、救いたまえ！」。「シオンを呪う者たちは、主が彼らを撃たれる。そして枯れた草のごとくに、火によって燃やし尽くされる」。「栄光は」、「すべての霊を生かし聖化する聖霊は、三位の一体性のうちに、父と子とともに、神秘のうちに相輝く」。「今も」、「聖霊は高価な恩寵を注ぎ、その飲み物とともに、あらゆる被造物を生かしめる」。

もっともダーモーツでは、当該週の調にあわせた第2調のものを、第3アンティフォンまで正確に速読していた⁶。①「わたしはわが心の眼を天にまで挙げる。わが救い主よ、あなたの許にまで。わたしをあなたの照らしにより守りたまえ」「わがキリストよ、われらを憐れみたまえ。われらは何時いかなる時にもあなたに対して多くの罪を犯した。終末の前に、あなたの前に罪の赦しを得られるよう、道を開きたまえ」「栄光は」「今も」「あらゆる被造物の上なる支配、聖化、高挙は聖霊にこそ相応しい。父と子に同一本質なる神なれば」

②「もし主がわれらとともにおられないなら、敵であり殺戮者でもある者から、

誰が逃れられようか」「わが救い主よ、あなたのしもべを人々に委ねたもうな。彼らは獅子のごとく、われに襲い掛かる、敵なれば」「栄光は」「今も」「生命と栄誉の源は聖霊に属す。彼は神なれば、あらゆる被造物に力を賦与し、子を通して父のもと、彼らを見そなわす」③「主に信を置く者は聖なる山のよう。彼らはベリアル攻撃にも全く揺るがない」「神のために生きる者たちをして、不法へと裁かせ給うなかれ。その鞭をしてキリストは自らの定めを禁ずるのだから」「栄光は」「今も」「聖霊によりあらゆる叡智は花開き、恩寵は使徒へと降り、殉教者たちはその闘いのゆえに栄冠を受け、預言者たちは見はるかす」。

六. 続いて、司祭「謹んで聴こう！あなた方すべてに平安！叡智！謹んで聴こう！」の後、この日の「プロキメン」が歌われる（IV②i）。まず復活のものである（第2調）。これは、詩篇第7編より「主よ立ち上がりたまえ、わが神よ。あなたが定めた命にしたがって。民の群れはあなたの周りに集う」であった。つづいて祝日のプロキメン（V、第4調）「わたしはあなたの名を思い起こす、すべての民からすべての民に到るまで」が歌われる。挿句「少女よ聞け、そして見よ。耳を傾けよ。あなたの民と父の家を忘れよ」が速読される。再度「わたしはあなたの名を思い起こす、すべての民からすべての民に到るまで」。

司祭は続ける。「主に向かって願おう」 会衆「主よ憐れみたまえ」 司祭「われらの神よ、あなたは聖なる方、聖なる者のうちに憩われる。父と子と聖霊よ、われらはあなたを讃える、今もいつも世々とこしえに」 会衆「アーメン」

司祭「すべての霊は主を讃えよ」 会衆（当日のプロキメンの節で）「すべての霊は主を讃えよ」 挿句「主の聖なるものにおいて主をほめたたえよ」「すべての霊は主を讃えよ」 司祭「聖なる福音を聴くのにふさわしくあれるよう、主に向かって平安のうちに願おう」 会衆「主よ憐れみたまえ」（×3）

七. 司祭は会衆に祝福を与える。「あなたがたすべてに平安があるように」 会衆「あなたの霊にも」 司祭「叡智！ 真なる信徒たちよ、聖なる福音を聞こう。聖～福音の朗読」 会衆「あなたに栄光あれ、主よ、あなたに栄光」 司祭「謹んで聴こう！」。

これに続くのが朝課の中心を構成する福音朗読である。主日には次の11個所のうちから選ばれるが、いずれもイエスの復活を述べた箇所である。①マタイ 28. 16-20 ②マルコ16. 1-8 ③マルコ16. 9-20 ④ルカ24. 1-12 ⑤ルカ24. 12-35 ⑥ルカ24. 36-53 ⑦ヨハネ20. 1-10 ⑧ヨハネ20. 11-18 ⑨

ヨハネ20. 19-31 ⑩ヨハネ21. 1-14 ⑪ヨハネ21. 15-25。

これは朝課における「復活の福音」を形成し、「第×調」の規定が8でめぐることに対して11を基調として回転する。このほか固定祝日にはそれぞれ固有の朗読箇所が定められていて、8月15日はルカ1. 39-49; 56であった（これは9月8日や11月21日などのものと同一である）。聖母の祝日には、基本的に聖書朗読に関して祝日のものを優先させることがテュピコンにおいて定められている。

司祭用祈祷書117頁；「司祭は当該週の福音箇所を読み上げる。主日には規定された復活の11箇所のうちから選ぶ。週日で大聖人の日であれば、聖人（特有）の聖書箇所、主と聖母の記念日には、何曜日であっても、祝日のもの」。

朗読が終わると会衆は「あなたに栄光あれ、主よ、あなたに栄光」と応じる。

八. 続いて司祭は「キリストの復活を目にし、われらはただ一人罪なき主イエスを崇敬する。あなたの十字架を前に、われらはキリストにぬかずき、あなたの聖なる復活を歌い寿ぐ。あなたはわれらの聖なる神、あなたを措いてわれらは他のものを知らず、ただあなたの名を唱える。すべての信徒よ、来たれ。われらはキリストの聖なる復活に身をかがめよう。見よ、十字架を通じて全世界の喜びが到来する。絶えず神を祝しつつ、われらは主の復活を歌う。主は磔刑の苦難を忍び、死をもって死を打ち滅ぼした」と唱える。

会衆は詩篇50編の朗誦で応ずる。朗誦の間、司祭は会衆が接吻できるよう、福音書を信徒のために聖堂中央部にて開き、会衆は行列をなしてこれに接吻する。詩篇に続き、「栄光は」をはさみ、この日は聖母の祝日であったため、会衆は「いとも聖なる神の母の祈りによりて、憐れみ深きわれらが主よ、われらを罪の重さから浄めたまえ」と歌い「今も」をはさんで、同一句を繰り返す。「神よ、あなたの大いなる憐れみによりてわたしを憐れみ、あなたの同情の豊かさによってわたしの悪を取り去りたまえ」という「先句」をはさみ、第6調の「おお神の母よ、いとも聖なるあなたの体の埋葬の準備ができたとき、使徒たちはあなたの休らいの床を囲んで立ち、深い感動とともにあなたを見つめた。そのうち何人かは、生命を失ったあなたの体を目にして、畏れに包まれた。しかしペトロは溢れる涙のうちに口ごもった。〈おおとめよ！ 葬衣に包まれたあなたの姿を目にするものの、それは万人の母の姿。わたくしはあなたに恐れおののく。来たるべき生命の喜びは、あなたに宿られたのだから。しかし、おお清らかなる方よ、あなたの御子と神とに執り成したまえ。主よ、あなたの霊的な群れを、傷なく守りたまえ、と〉」が歌われた。

次いで司祭の長い祈祷文があるが、これは前晩晩課のリティアで用いられたもの①と同一である。その後、会衆「主よ憐れみたまえ」(×3) 司祭「主よ憐れみたまえ」(×6) 会衆「主よ憐れみたまえ」(×3) 司祭「あなたの御一人子の憐れみ、同情、人間愛により、御一人子とともに、またいとも聖にして善き思いを持ち、生命を与えるあなたの霊とともに祝される方よ、今もいつも世々とこしえに」 会衆「アーメン」 となる。

九、続いて「カーノン」である(IV②j)。本来カーノンは各調ごとに九歌より成る。それぞれが以下の聖書箇所(歌唱部)に基づき、教父時代(ダマスコのヨハネの頃完成)に仕上げられた、いわば壮大な「予型論」の集大成だと言える。原テキストは、それぞれ(1)出エジプト記15. 1-19 (2)申命記32. 1-43 (3)サムエル記上2. 1-10 (4)ハバクク書3. 2-19 (5)イザヤ書26. 9-20 (6)ヨナ書2. 3-10 (7)ダニエル書3. 26-45 (8)ダニエル書3. 52-88 (9)ルカ福音書1. 46-55; 68-79 である。このうち第2歌は、その懺悔的な性格からふだんは省かれる。

司祭用祈祷書122頁; 「主日には当該調の復活カーノンを、イルモス(9つのカーノンそれぞれの最初の唱句)一つずつの後、直ちに「季節固有カタヴァシア」の適わしいイルモスを続ける。大聖人の日には、聖母のイルモスを、やはり季節固有のカタヴァシアと交互に歌う」。ただしこれはハンガリーの司祭用祈祷書の慣例上の欠落であり、本来はここに「トロパール」と呼ばれるものが挿入される。ダーモーツの修道院では本来のあり方に従っていた。司教区用祈祷書・司祭用祈祷書とも、この「トロパール」は記載していない。また司教区聖堂ではさらに簡略化を施し、「カーノン」としては「季節固有カタヴァシア」のみを歌う習慣であった。

8月15日は第2調で、まず(1)をめぐり、イルモス①「かつてファラオの大軍を、いと高き方の力が深みへと沈めた。それは肉となられた御言葉、そして勝ち誇る罪を亡きものとした。いと高き主が栄光をもって讃えられるため」が歌われる。次いで挿句①「われらの主よ、あなたの復活に栄光あれ」。トロパール①a「おお善き方よ、われらがあなたの命に背いたがために世に定められたその支配者は、あなたの十字架によって裁かれた。死すべき者としてあなたを攻めたがゆえに、彼はあなたの御威によって倒れ、弱き者とされた」。挿句①。トロパール①b「あなたは人の贖い主、朽ちることのない生命の主として世に来られた。あなたは復活によって死の覆いを打ち破られた。われらはみなその復活を寿ぐ。いとも栄えあるものなれば」。挿句②「いとも聖なる神の母よ、

われらを救いたまえ」。トロパール①A「天の見えざる住みびとの群れは、シオンであなたの神々しき亡骸に付き添う。すると突然使徒たちの一団が地の果てより集い来たりて、すぐにあなたのそばに列を成す。神の母よ、染みなきおとめよ、彼らとともにわれらはあなたの威厳ある記憶を讃える」。挿句②。トロパール①B「清きおとめよ、あなたは神の子を身ごもることで、自然に反して勝利の栄冠をかち取られた。しかしあなたの創り主にして子なる方を模すことで、超自然的に自然の法に従われた。そのように亡くなくても、あなたは御子とともに復活し、永遠に生きる」。挿句②。トロパール①C「若きおとめごらは、女預言者ミリアムとともにいま声を挙げて別れの歌を歌う。いまおとめにして唯一なる神の母は、天における定められた場所へと移される」。「栄光は」。「今も」。テオトキオン①「天の神的な幕屋は、生ける天としてあなたを迎え入れる。いとも浄らかなるおとめよ、そして咎なき花嫁として、あなたは王たる神の前に輝かしく敬われる」。カタヴァスィア①「わたしはわが目を挙げ、霊の息吹に包まれる。おお、母なる王妃よ、誉れの歌をあなたに歌い、あなたを莊厳に寿ぎ、あなたの不思議な業を、喜びをもって告げ知らせる」。これらの唱句にはダマスコのヨハネによるものが多い。

次に(3)をめぐって同様の連が組み立てられる。イルモス③「荒れ野は花開く、諸国の民のわびしい教会が。主よ、あなたの到来によって、白百合のように。わが心はそのうちに力づけられる」。挿句①。トロパール③a「あなたの受難により、被造物はあなたを目にしたときに変えられた。あなたに命じられることすべてを為したときに。見かけは卑しく、不法な者にはあざ笑われたものたちが」。挿句①。トロパール③b「あなたは自らの手で、わたしをあなたの像として塵から創られた。わたしが罪によりふたたび死の塵にまみれるとき、あなたはわたしとともに、おおキリストよ、黄泉にまで降られた」。挿句②。トロパール③A「おお染みなき方よ、あなたが死すべき身の女性でありながら、超自然的に神の母であることを知って、輝かしき使徒たちは畏れる手で、栄光に光るあなたに触れた。神を宿した幕屋であるあなたを見つめながら」。挿句②。トロパール③B「正しき罰は、傲岸な者らの不敬な手を裁くために介入した。神は神性の栄光をもって、生ける櫃、御言葉が肉となった櫃に相応しき畏敬をみそなわす」。「栄光は」。トロパール③C「浄らかなるおとめよ、死すべき者の腰より生まれたる方よ、あなたの最期の旅立ちは本性に倣うものであった。だがあなたは真なる生命を誕生させたがゆえに、位格において神的生命である方のところに旅立たれた」。「今も」。テオトキオン③「神学者たちの群れ

は地の果てより集い、天使たちの大群もシオンへと急ぐ。全能なる方の命を受けて。王妃たる方よ、あなたの葬礼に相応しく与かれるように」。カタヴァスィア③「あなたを讃える者たちを、神の母よ、恩寵の生きた尽きぬ泉である方よ、ひとつの歌隊となし、霊的に強め、あなたの天なる栄光のうちに、朽ちぬ冠もて報いたまえ」。

(3)のあとは小連祷、末句「あなたはわれらの神、父と子と聖霊よ、われらはあなたをほめ讃える、今もいつも世々とこしえに、アーメン」が異なる。

司祭用祈祷書123頁；「小連祷のあとは聖人のコンタークとイコス、祝日中間中は祝日のイパーコイもしくはカティズマーリオン、週日にはカティズマーリオンが読まれる。2人の聖人がいる場合には、2番目の聖人のコンタークとイコス」。すなわち聖母の祝日は、主の復活と聖母の記念とが重なることで「二聖」なのであり、その場合、主の復活も聖母の記念に譲る（11月21日のみは例外、後述第5節参照）。復活が「2番目の聖」とされ、それがここにも適用されることになる。このように、第Ⅲ歌のあとは、主日にも「聖人」であり、第Ⅵ歌のあとが復活である。しかし聖母の祝日には聖母が優位に立ち、復活がⅢに来るわけである。

まず、ここでは復活コンターク（Ⅳ②k、第2調）「全能の救い主よ、あなたは墓より復活し、黄泉はこの奇跡を見て恐れをなし、死者たちは復活した。被造物はこれを目にし、あなたとともに喜ぶ。アダムは歡喜し、世界はあなたをとこしえに讃える」。イコスも第Ⅵ歌後の第2調のものをここに適用し、速読する（復活のイコスは第Ⅵ歌の後に掲載されているが、ここに移読；Ⅳ②l）。「あなたは闇に閉ざされた者たちの光、われらすべての復活にして、人類の生命。あなたは自らとともに、われらすべてを復活させられた。われらの救い主よ、あなたは死の力を打ち砕いた。おお御言葉よ、あなたは黄泉の門を打ち破った。人を愛する方よ、死者たちはこの奇跡を目にして驚きあやしみ、すべての被造物はあなたの復活に喜ぶ。それゆえわれらの救い主よ、われらもござってあなたの遜りを讃美のうちに誉め讃え、世は止むことなくあなたに歌を捧げる」。

(4)イルモス④「あなたはおとめより生まれ、仲介者ではなく天使でもなく、主ご自身があなたのうちに肉を取り、全人類の救い主となった。それゆえわたしもあなたに向かって叫ぶ。主よ、あなたの力に栄光あれ！」。挿句①。トロパール④a「わが神よ、あなたは裁かれる者として裁きの座に立ち、おお主よ、諸国の民に裁きを宣告することはなさらなかった。おおキリストよ、それはあ

あなたが受難を通じて世のためにもたらされた救い」。挿句①。トロパール④b「敵の剣はあなたの受難の前に折れた。しかるにあなたの黄泉への降下により、あなたに刃向かう者どもの町は略奪され、暴君の傲慢は挫かれた」。挿句②。トロパール④A「民よ、見よ、そして驚くがよい。聖にして最も明らかな神の山が、天の丘をはるかに越えて挙げられた、地上の天がその住まいを、天上の朽ちることなき場に置いたときに」。挿句②。トロパール④B「清きおとめよ、死はあなたにとって永遠のそしてより善き生命への渡し場となった。あなたは、滅びる生命から、真に神的で変わることなき生命へと移された。あなたの御子、主を喜びのうちに見つめるために」。挿句②。トロパール④C「天の門は挙げられ、天使は讚美の歌を歌い、キリストはおのが母の処女なる宝庫を受け取られた。ケルビムは喜びのうちにあなたの前より退き、セラフィムは歓喜のうちにあなたを讃える」。挿句②。トロパール④D「万物の王の生ける天が、地の窪みの下にまで降るのを見るのは驚くべき不思議。あなたの業はなんとすばらしきことか！ おお主よ、あなたの力に讚美」。「栄光は」。トロパール④E「神の母よ、あなたが挙げられるとき、天使の群れは畏れと喜びのうちに、聖なる翼であなたの体を包んだ。その翼は神を容れるに相応しき翼」。「今も」。テオトキオン④「知解を超えたその方は、彼女の胎の実り。それゆえ彼女は〈天〉と呼ばれる。この方が、人として埋葬を自ら受けられたのなら、婚宴なしに彼を生んだ彼女が、何ゆえ埋葬を拒みえようか?」。カタヴァスィア④；これはふだんの聖母のための季節固有カタヴァスィア「神性の王たる座に栄光を帯びて着き、軽い雲のごとくに降下された、いとも神なるイエス。あなたに願ひする、その万能の力もて、あなたにこう叫ぶ者たちを救いたまえ。〈あなたの力なるキリストに栄光あれ!〉」ではなく、「おおいと高きところの方よ、あなたはおとめより肉を取られることを望まれる。これは汲み尽くせぬ神の計らい。預言者ハバククはこれを知り、こう叫んだ。〈主よ、あなたの力に栄光あれ!〉」。

(5) イルモス⑤「われらの神なるキリストよ、あなたは神と人との仲介者となった。あなたはわれらの治め主として、無知の夜から光の源泉へ、あなたの父へとわれらを導いた」。挿句①。トロパール⑤a「おおキリストよ、あなたは杉のごとくに敵の傲岸を打ち砕き、自らの自由意志により受難を諾われたとき、あなたは肉体とともに挙げられた、おお主よ、糸杉、松、杉のかなたへ」。挿句①。トロパール⑤b「おおキリストよ、あなたは命なき亡骸として最も深い窪みへと葬られた。しかしおお救い主よ、あなたはその腕で、墓に忘れられて眠る死者たちを自ら立ち上がらせた」。挿句②。トロパール⑤A「あたかも

雲に乗るかのごとくに、使徒の一団は、おおおとめよ、あなたに仕えるため、地の果てよりシオンに集められた。それはいとも軽き雲、いと高き方なる神、義の太陽が、闇に住む者どものためにそこから光を放たれた雲」。挿句②。トロパール⑤B「靈感を受けた神学者たちの舌は、聖霊と相和し、ラッパよりも盛大に、神の母のための葬礼の歌を奏でた。神の受肉の汚れなき泉、万人にとっての生命と救いの源よ、祝されよ。「栄光は」。トロパール⑤C「神学者たちのラッパは、きょう高らかに奏でよ。人の舌は、いま無数の声で讃美を響かせよ。大気は無限の光に照らされて、それを反響させよ。天使らは、おとめの御眠りを讃歌でもって讃えよ。「今も」。テオトキオン⑤「おおおとめよ、選びの器は、我を忘れ、すっかり天上界へと運ばれて、あなたへの讃歌のうちに自らを忘却する。おお、いとも讃えられる方、神の母よ、彼は真に神により満たされ、それを万人の前で証しした」。カタヴァスィア⑤；これもふだんの聖母のための季節固有カタヴァスィア「すべての者は、あなたの天における栄光に驚嘆する。おお染みなき方よ、あなたはその胎に万物の神を宿された。そして永遠の御子を産んだ。この方はあなたに歌を捧げる者たちに平和を賜る方」ではなく「万物は驚嘆する、あなたの栄光のうちに。男を知らぬおとめよ、あなたは唯一の永遠なる方を、地上にもたらし、終わりになき生命をわれらすべてに賜り、あなたに歌を献げる者たちに救いを授けられた」。

(6) イルモス⑥「罪の深みにあえぎつつ、あなたの憐れみの汲み尽しえぬ深みに向かい、わたしは助けを求める。主よ、死の淵よりわたしを救い出したまえ」。挿句①。トロパール⑥a「義なる人が罪人として裁かれ、無法者とともに木の柱に釘付けにされた。自らの血で罪びとらに赦しを与えるために」。挿句①。トロパール⑥b「一人の人、最初のアダムを通して死が古き世界に入った。一人の人、神の御子によって復活が証しされた」。挿句②。トロパール⑥A「万物の治め主にして神は、超自然的な事柄をあなたに授けた。主は、出産の際にもあなたを処女のまま保ったのと同じように、あなたの亡骸を、墓の中で腐敗せぬままに留められた。こうして主は、自らとともに、神的な天上への移しによってあなたに栄光を帰し、御子として母に、誉れを授けた」。挿句②。トロパール⑥B「おおおとめよ、あなたの御子は、あなたが真に至聖所に住まわれるようにされた。非実体的な火の輝ける灯台、神的な炭火の黄金の香炉、神によって記された石版を容れる壺また竿、聖なる櫃、生命のパンを置く食卓として。「栄光は」。トロパール⑥C「生命は、あなたの処女性の鍵を緩めることなきままに、あなたから始まった。ならばいかにして、あなたの染みなき

幕屋、生命の源が、死の経験に与かるものとなりえようか。「今も」。テオトキオン⑥「閉ざされた聖域として、あなたは永遠の生命を見出した。あなたは、生命を人として産み、死を通して生命へと渡された」。カタヴァスィア⑥「天の智慧に満たされた神の母のため、きょう、いとも聖にして祝された記念を寿ぎつつ、信徒らよ、来たれ。われらは喜びのうちに喝采しよう、そしてあなたから生まれた神をほめたたえよう」。

(6)のあとは小連禱、末句「あなたは平和の王、われらの霊の救い主、父と子と聖霊よ、われらはあなたをほめ讃える、今もいつも世々とこしえに、アーメン」が異なる。

司祭用祈祷書123頁；「ここでは、主日には復活コンタークとイコス。週日には聖人の、もし2人聖人がいる場合には最初の。祝日期間中に当たる週日には祝日のもの」。ミクローシュの祝日にはここで初めて祝日コンタークが歌われる。8月15日の祝日コンターク（V、第2調）は「祈りにおいては疲れを知らぬ神の篤信なる母、出産にあってはわれらの変わることなき希望を、死と墓とは自らのものとなし得なかった。なぜなら生命を生んだ母として、彼女の処女なる胎に宿られた子なる神が、彼女を永遠の生命の栄光へと移されたため」。祝日イコス（速読、V）「わが救い主よ、わが思いを固めたまえ。わたしはあなたの染みなき御母を、あえて世のための守りの磐と歌おう。わが言葉を編む際に力づけたまえ、そしてわが鈍き思いを助けたまえ。あなたは、救いを求めて呼ばれる者、信もて願う者の望みを満たす方。それゆえ、あなたを誉め歌う言葉、揺らぐことのない知性をわたしに授けたまえ。照らしのあらゆる賜物はあなたに由来する。あなたは永遠のおとめの胸許に住まわれる方」。

(7)イルモス⑦「悪しき僭主の神を知らぬ命令は、舐め尽くす火をもたらした。しかしキリストは篤信の若者らに、霊的な雫を滴らせた。主が祝せられ、誉れを受けますように」。挿句①。トロパール⑦a「おお主よ、あなたは憐れみの心から、人類が、死という暴君に支配されていることを甘んじて座視なさらなかった。むしろ人となって到来し、自らの血によって人類を救われた。あなたは讃えられ、高く挙げられる」。挿句①。トロパール⑦b「おおキリストよ、黄泉の門番は、あなたが懲罰の衣をまとっているのを見て、恐れおののいた。主よ、あなたはこの愚かな暴君を打ち負かし、支配下に治めるために来られた。あなたは讃えられ、高く挙げられる」。挿句②。トロパール⑦A「モーセは怒り、神により神的な霊をもって作られた石版を打ち砕いた。しかし彼の主は、主に誕生をもたらしたおとめを、天上の住まいのために傷なきままに留

め、いま彼女を天上に住ませた。彼女とともに、われらも喜びに踊り、キリストに向かって叫ぶ。〈いとも栄光に満ちた神よ、われらの神にしてわれらの祖先の神、あなたは祝せられる〉」。挿句②。トロパール⑦B「清き唇のシンバルと、心の妙なる竖琴、高鳴る胸の響くラッパにあわせて両の手を打ち鳴らしつつ、われらは清きおとめの高挙のため、この選ばれた幸多き日に叫びを上げる。〈いとも栄光に満ちた神よ、われらの神にしてわれらの祖先の神、あなたは祝せられる〉」。挿句②。トロパール⑦C「神の息吹を受けた人々が集う。神の栄光の幕屋が、シオンにあって天の住まいへと移される。そこには寿ぐ人々の清き調べと、慶びのうちにキリストに向けて叫ぶ人々の、言葉に尽くしがたい歓喜の音が響く。〈いとも栄光に満ちた神よ、われらの神にしてわれらの祖先の神、あなたは祝せられる〉」。挿句②。トロパール⑦D「若者と若き娘よ、年老いた者や為政者たちよ、王と裁き手たちよ、おとめにして神の母なる方の記憶を寿ぐなら、こう歌うがよい。〈主にしてわれらの父祖たちの神よ、あなたは祝せられよ！〉」。「栄光は」。トロパール⑦E「天の山々は、霊のラッパをこだませよ。丘はいま喜ぶがよい。神にもまごう使徒たちは喜び踊るがよい。王妃は御子の許に挙げられる。彼女は主とともに永遠に治められる」。「今も」。テオトキオン⑦「あなたの神的で染みなき母が、いとも聖なる高挙に与かる。天の諸々の力はそのために集い、あなたに向かってこう叫ぶ地上の人々と、喜びを共にする。〈おお神よ、あなたは祝せられる〉」。カタヴァシア⑦「信篤き若者らは、偶像の前に創造者を措いて屈することはなく、むしろ火による試みを雄々しく耐え抜き、喜びのうちにこう歌った。〈われらの父祖たちの誉れある神よ、あなたは祝された方！〉」。

(8) イルモス⑧「バビロンの燃え盛るかまどは、神の命により二種の力で働いた。カルデア人たちを焼き尽くす一方、信徒たちを雫で潤した。彼らは信もてこう歌う。〈主をほめたたえよ、主のすべての業よ〉」。挿句①。トロパール⑧a「おおキリストよ、あなたの肉体の衣が、その血に赤く染まるのを見て、天使の群れは、あなたの長き苦難に恐れ驚き、こう叫ぶ。〈主のすべての業よ、主を讃えよ〉」。挿句①。トロパール⑧b「おお憐れみ深き方よ、あなたはその復活によって、死すべきわが本性を不死性でまとった。それゆえあなたの選ばれた民は、おおキリストよ、あなたに向かって喜び歌い、こう叫ぶ。〈死は勝利のうちに飲み込まれた〉」。挿句②。トロパール⑧A「シオンの聖櫃に付き従う神的なすべての群れは、こう叫ぶ。〈生ける神の幕屋よ、どこへいま去られるのか。こう歌う者たちを見捨てたもうな。《われら救われた者たちは、唯一

なる創り主を讃え、世代を超えて高らかに賛美する』。挿句②。トロパール⑧B「染みなきおとめは、地上を去るとき、肉となった神をその抱擁で抱いた両の手を挙げ、産み落とした一なる方に母の思いからこう語る。〈あなたがわたしのものとされた人々は、世々にわたり保たれる。彼らはこう叫ぶ〉。〈われら救われた者たちは、唯一なる創り主を讃え、世代を超えて高らかに賛美する〉」。挿句②。トロパール⑧C「染みなきおとめよ、為政者たちと権威とは、力、天使、大天使、玉座、主君、ケルビムそれに怖ろしきセラフィムとともに、あなたの記憶を賛美する。われら人類は、世々にあなたを讃え、高らかに賛美する」。次には「栄光は」ではなく「われらの主、父と子と聖霊とを讃えよう」が挿入される（これは11/21もそうである）。トロパール⑧D「肉を受けた際、あなたの染みなき胎のうちに不思議にも宿られた主は、自らあなたのいとも聖なる霊を受け取り、忠実な子として、自らとともにその霊を休らわせる。それゆえ、おおおとめよ、われらはあなたを世々に讃え、高らかに賛美する」。「今も」。テオトキオン⑧「おお、常世に処女なる神の母の奇跡は、何と理解しがたきことか。神の母は墓に降り立ち、それを聖なる楽園に変えた。きょうわれらは、喜びとともにその傍らに立ち、こう歌う。〈主のすべての業よ、主を讃えよ。主をとこしえに誉め歌え〉」。

この後、カタヴァスィア⑧の前の先句があり、これはカタヴァスィアの調に合わせて歌われる。「われらは主を讃え、祝し、崇め、主を歌い、世々とこしえに主を誉め歌う」。カタヴァスィア⑧「おとめより生まれた御子は、神をおそれる若者たちを、朝早く火のかまどの中で守られた。その折には単に予型において、しかし今や真実のうちに働かれ、万物全体を、讃美の歌へと誘う。〈主のすべての業は主を讃えよ。主をとこしえに讃美せよ〉」。

カーノンのうち第9歌のみが新約の歌であることに鑑み、第9歌の前に聖母讃歌が挿入される。司祭「神の母と光の母を歌でほめたたえよう」。以下、①「わが霊は主を讃え、わが霊はわが救い主なる神にあって喜ぶ」。「ケルビムよりも尊く、セラフィムよりも類いようもなく栄えある方、あなたは神を、御言葉を、陣痛なくお産みになった。真なる神の母よ、われらはあなたを誉め歌う」。②「僕の謙遜を目にして、これよりすべての民はわたくしを幸いな者と伝える」。「ケルビムよりも」。③「力ある方が、わたしに驚くべき業をなされた。その方の名は聖、その憐れみは諸国の民から諸国の民にいたるまで、彼を畏れる者の上にある」。「ケルビムよりも」。④「主は力ある業を、両の腕をもってなし、心ばえにおいて傲岸なる者らを散らされた」。「ケルビムよりも」。⑤「主は力

ある者らを君主の座より引き降ろし、謙遜なる者たちを高められた。飢える者たちを善きもので満たし、富める者たちを空のまま去らせた。「ケルビムよりも」。⑥「主はイスラエルを祭壇とし、その仕えを憐れみにより思い起こした。われらの師父たち、アブラハムとその裔に、いにしえに語られたように」。「ケルビムよりも」。司教座聖堂でのミクローシュの祝日には、会衆は上記①から⑥を続けて歌い、最後に「ケルビムよりも」を付して簡略化していた。

(9) イルモス⑨「始めなき父の子、おとめより肉を取った主なる神が、われらのうちに現れ、闇に沈める者たちを照らした。それゆえわれらは、いとも祝せられし神の母よ、あなたをほめ歌う」。挿句①。トロパール⑨a「おお救い主よ、あなたの染みなき十字架の、三度祝された木は、楽園に植えられるかのごとく、カルヴァリオに据えられた。そして、おおキリストよ、あなたの神となるわき腹から神の血と水を受け、われらのために生命の花を咲かせた」。挿句①。トロパール⑨b「おお全能なる主よ、あなたは十字架に懸かることで力あるものを低くし、黄泉の牢獄におとしめられていた人間の本性を高めることで、これを父の玉座へと移し代えた。あなたがその本性を帯びて来られるとき、われらはあなたを崇め、大いなるものとする」。「栄光は」。トロパール⑨c「われら信徒たちは正しき信もて三位なる一性、同一本質なる三位一体を讃える。その分かたれざる本質、いとも神的にして三重の光を放ち、蔭ることなく輝き、唯一混合せずわれらの上に光を注ぐ一性を讃美しよう」。挿句②。トロパール⑨A「天使の諸力はシオンにあって、彼らの主が自らの手に婦人の靈魂を携えるのを見て驚愕した。主は御子に相応しくも、自らに染みなき誕生をもたらした方にこう語りかけた。〈来たれ、誉れある婦人よ、あなたの子そして神とともに、栄光を受けよ〉」。挿句②。トロパール⑨B「使徒たちの群れは、神を容れたあなたの体を包み、畏れをもってこうあなたに語りかける。〈あなたが天なる婚礼の部屋へ、御子のもとへ去られるとき、どうかあなたの嗣業を永遠に救いたまえ〉」。挿句②。トロパール⑨C「いざ来たれシオンに、生ける神の聖なる豊かな山に、神の母を目にして喜びに踊ろう。キリストが御身の母として、おとめをはるかに善き、さらに神的な幕屋、至聖所へと移された」。「栄光は」。トロパール⑨D「信徒らよ、来たれ、神の母の墓に近づき、かき抱き、唇・目・心の眉でもって真摯に触れよう。そして尽きることなき泉より沸き出でる豊かな癒しの賜物を受けよう」。「今も」。テオトキオン⑨「おお生ける神の母よ、われらよりこの葬りの歌を受けたまえ。そして光をもたらす神的なあなたの恵みでわれらを覆いたまえ。われらの君主に勝利を、キリストを愛する民、靈魂

の赦しと救いを歌うわれらに平和を与えたまえ」。カタヴァシア^⑨「聖霊によって照らされた、地の死すべき者たちは喜び、天の力は歓喜する、祝いの日を寿ぎつつ、神の母の崇敬のため、挙ってこう叫ぶ。〈めでたし、祝された方、染みなき神の母なるおとめよ！〉」。

小連禱、末句「すべての天の力はあなたを讃え、父と子と聖霊よ、われらはあなたをほめ讃える、今もいつも世々とこしえに、アーメン」が異なる。

十. その後、司祭が「主は聖、われらの神は」を計3回繰り返し、会衆が同じく「主は聖、われらの神は」を3回繰り返して歌う。

司祭用祈祷書125頁；「この後、復活朗読箇所番号と同じ番号の、復活の「光の歌」(I3)が読まれる。週日には週日の、祝日には規定に対応する「光の歌」を、〈主は聖〉なしで読む」。

その後「光の歌」^⑩「神的な復活の後、主はペトロに三度尋ねられた。〈わたしを愛するか?〉と。そしておのが群れの主たる牧者とされた。しかしペトロはその後、イエスが愛された弟子が来るのを見て、治め主にこう尋ねた。〈彼はどうなるのですか?〉すると主はこう言われた。〈もし彼がここに留まることをわたしが望んだとして、おまえはそれをどうしようというのか。ペトロ、あなたはわたしに従いなさい!〉と」は速読され、「栄光は」「今も」。この後祝日の「光の歌」、すなわち「地のすべての果てより集える使徒たちよ、わが肉をゲトセマニの丘に埋めよ。そしてわが子にしてわが神よ、わが霊を移したまえ」は歌唱された。ミクローシュの祝日には、「栄光は」「今も」をはさんで「光の歌」は前後2部に分かたれる。

十一。「光の歌」の後、「すべての霊は主を讃えよ。あなた方は天において主を讃えよ。いと高きところにおいて主を讃えよ。神よ、歌はあなたに相応しい」「すべての天使は主を讃えよ。すべての軍は主を讃えよ。神よ、歌はあなたに相応しい」と唱えられる。

次いで詩篇148編および第149編が速読される。

十二、続いて「讃美のスティヒラ」である。司祭用祈祷書128頁；「ここには4スティヒラのための先句、8スティヒラのための先句、が定められている。もし6スティヒラの場合には、4スティヒラの場合と同じ場所からはじめるが、その最後には、祝日ないし聖人の前晩より先句スティヒラ先句を取る。また主日には8スティヒラが定められているため、これに続く先句(下記(7)(8))を補充的に用いる」。

8月15日には、まず先句(1)「これは、主のすべての聖なる者たちの栄光」に

続き、復活ステイヒラ（Ⅳ②m、第2調）を計4連（下記①②③④、先句とともに）、続いて祝日のステイヒラ（Ⅴ）より計4連（⑤⑥⑦）を歌う。ただし祝日のステイヒラとして定められているものは計3個である（ミクローシュの祝日には計6連）。このため、第1番目（⑤）を二度繰り返す。一方復活のステイヒラは計8連が掲載されているが、後半4連は「アナトリウスのステイヒラ」とされている。この日は前半の4連、つまりアナトリウスのもの以外を歌うことになる。ちなみにアナトリウスは7月3日を記念日とし、メノロギオンの記載には「アレクサンドリア教会の説教者であったが、聖フラヴィアノスの後継者としてコンスタンティノポリスの総司教となり、カルケドンでの第4回公会議（451）の召集に尽力し、自らも出席した。458年に亡くなった。土曜晩課と主日朝課の先句には所謂「アナトリウスのステイヒラ」が見られる」とある。

先句は詩篇第150編(2)「主を讃えよ、その聖所にあつて、彼を讃えよ、天の力強き蒼穹にあつて」(3)「力強く主を讃えよ、大いなる群れを成して主を讃えよ」(4)「ラッパの音で主を讃えよ。豎琴とツィタラで主を讃えよ」(当日はここで調が変わる)(5)「ドラムを打ち、聖歌隊で主を讃えよ。輪になって、楽器を打ち鳴らして主を讃えよ」(6)「音の巨大なシンバルを鳴らして主を讃えよ。シンバルの陽気な音で主を讃えよ。すべての霊は主を讃えよ！」(7)「主よ起ち上がりたまえ。あなたの手を指し挙げたまえ。貧しき者たちのことをとこしえに忘れたもうな」(8)「主よ、わたしはあなたに心のすべてをもって、感謝を捧げる。あなたのすべての奇跡を語る」。

第2調による「復活ステイヒラ」は、まず①「すべての霊とすべての被造物は、主よ、あなたを讃える。あなたは十字架によって死を滅ばし、人々に、死者の中からの自らの復活を証しされた、唯一人を愛する方として」。②「ユダヤ人たちをして語らしめよ。〈見張りの男たちがわれらの王を隠してしまった〉と。なにゆえ、墓石が生命の岩を留めおけようか。むしろあなた方は、死者を差し出すのか、もしくは復活された方に対し、われらとともにこう祈るのか。〈救い主よ、あなたの憐れみの大きさに栄光あれ。あなたに栄光〉」。③「民は喜び、踊るがよい。墓石の上に座っていた天使がわれらの前に姿を現し、こう言った。〈キリスト、世界の救い主は、死者たちのうちから復活し、すべての者たちを芳香で包んだ。民は喜び、踊るがよい！〉」。④「主よ、天使はあなたが懐胎される前に、恩寵に満たされた方に祝辞をもたらした。天使は、あなたの復活に際しては、誉れあるあなたの墓から石を転がしました。大きな哀しみに代えて喜びの様を告げ知らせて。これはすなわち、死に代えて生命を与

える治め主を讃えること。それゆえわれらもあなたに叫ぶ。われらすべてに幸いをもたらす方、われらの主、あなたに栄光)。

祝日の「讚美スティヒラ」(第4調)。⑤「あなたの誉れある死に際し、天は喜び、天使たちの群れは地に住むすべての者たちとともに踊り、あなたを治め主の母として、讚美の歌をあなたに捧げる、いとも浄らかなる染みなきおとめよ。あなたは人類をいにしへの呪いから解放された」(×2)。⑥「地のあらゆる境から、神の示唆により、使徒たちの群れは集まり来て、あなたを埋葬する。そして地よりいと高きところへとあなたが挙げられるのを目にするや、大天使ガーボルの言葉をもって喜びのうちにこう叫ぶ。〈神をその胎に宿した方は祝される。出産を通して地に住む者たちを天上の者たちと結びつけた方は祝される〉」。⑦「心臓の下に生命を宿した方は、あなたの貴い死にあって、死すことのない生命へと移された。浄き方よ、この方をすべての天使たち、始めも力も、槍を持って運ぶ。使徒たちも預言者たちも、全被造物が、あなたの御子の染みなき両の手より、おとめなる母よ、神のいいなずけよ、かけがえなきあなたの霊を、拝受するとき」。

「栄光は」(第6調)。通常は当日の朗読箇所と関連し、ここには「光の歌」と同番号の「福音スティヒラ」が挿入される。この日は「栄光は」「今も」の次に指示されている次の句を「栄光は」の直後に動かす⁴。「生命を与える神の母よ、あなたの死すことなき死の場へと、使徒たちは雲によって上天へと運ばれ、世界に散っていた者たちがあなたの聖なる遺骸の前に、一団となって並び立った。彼らは聖母を崇敬をもって埋葬し、あなたに向かってガーボルの言葉をもって叫んだ。〈めでたし、恩寵に満たされた染みなきおとめ、主はあなたとともにおられる。主に対し、あなたの御子またあなたの神として、われらの霊の救いのために祈りたまえ!〉。「今も」。(第2調)「神の母である乙女よ、あなたは祝福に満たされた方、あなたから肉を受けた方が黄泉を征し、アダムを呼び起こし、呪いを終わらせ、エヴァを解放し、死を死したものとされ、われわれを新たな生命へと目覚めさせた。それゆえわれらはこう歌いつつ叫ぶ。〈われらの神キリスト、あなたは祝された方。あなたはこれらのことをこう望まれた。あなたに栄光!〉」。

続いて「神よあなたに栄光あれ、あなたはわれわれの上に光を輝かせてくださった」の後、主日祝日と週日とで次第が異なる。

十三. 主日祝日には、会衆は「大栄唱」を歌い上げる。①「いと高きところには神に栄光、地には平和、人には善き思いがありますように! われらはあ

なたを讃え、祝し、あがめ、ほめ歌う。われらの主、天の王よ！われらはあなたの大いなる栄光の故にあなたに感謝を捧げる。全能の父なる神、御一人子、主なるイエス・キリスト、われらの主なる神である聖霊よ。神の小羊、父の御子よ、世の罪を除きたもう方よ、われらを憐れみたまえ。世の罪を除きたもう方よ、われらの祈りを聞き入れたまえ。父の右に座したもう主よ、われらを顧みたまえ。あなたのみが聖、あなたのみが主、イエス・キリストよ、父なる神の栄光のために。アーメン。日々われらはあなたを祝し、あなたの名を世々とこしえに讃える」。②「この日、あらゆる罪からわれらを守りたまえ。われらの主よ、あなたは祝された方、われらの父祖たちの神よ。あなたの名はとこしえに誉れと栄光に満つ。アーメン。主よ、われらがあなたに信を置くとき、あなたの恵みがわれらの上にありますように。われらの主よ、あなたは祝された方。あなたの真理に向け、われらを諭したまえ。創造主よ、あなたは祝された方、あなたの真理に向け、われらを教えたまえ。聖なる方よ、あなたは祝された方、あなたの真理をもってわれらを照らしたまえ」。③「主よ、あなたは世代を越えてわれらの逃れ場。(頭を垂れて) わたしは言おう、〈わたしは主に対して罪を犯した。主よ、わたしを憐れみ、わが霊を癒したまえ〉。(頭を上げ) 主よ、わたしはあなたに逃れる。わたしを諭し、あなたの意向を果たさせたまえ、あなたはわたしの神、命の泉はあなたのうちにある。われらはあなたの光のうちに光を見る。あなたを知る者たちに、恵みを注ぎたまえ」。

そして司祭は「聖なる神、聖なる力、聖なる不死なる者、われらを憐れみたまえ」を歌い、会衆はこれを2度繰り返して歌う。「栄光は」「今も」「聖なる不死の者、われらを憐れみたまえ」「聖なる神、聖なる力、聖なる不死なる者、われらを憐れみたまえ」。

つづいてトロパールである。司祭用祈祷書131頁；「主日、復活の寿ぎを行うには次の2つのトロパールのうち一方を、当該週の調にあわせて歌う。祝日期間中には、祝日のものがこれに代わる。もし当日が大聖人の日であれば、聖人「栄光は」「今も」祝日、の順である。祝日期間でなければ、聖人のトロパールの後「栄光は」「今も」に、復活散会聖母讃歌を歌う」。これは1、3、5、7調と2、4、6、8調とで異なるものを用いる。前者では「今日こそ世の救い、われらは墓から復活された方、われらの生命の創始者に歌を献げる。彼は死をもって死を滅ぼし、われらに勝利と豊かな恵みをお与えになった」。一方この日は第2調であったため後者が歌われた。「墓より復活し、黄泉の縛めを解き放って、主よ、あなたは死の裁きをなきものとした。そして敵のわなよりすべ

ての者たちを解放された。そして使徒たちに現れると、彼らを福音の宣教のために遣わした。それによってかれらは平和を全世界にもたらした、唯一憐れみ深い方よ」。

続いて「重連祷」である。司祭「神よ、あなたの大きい憐れみによって、われらを憐れみたまえ。われらの願いを聞き、憐れみたまえ」 会衆「主よ、憐れみたまえ（×3）」（以下、司祭の各句に付す） 司祭「神を愛するわれらの司教～のため、われらの靈的師父たちのため、キリストにおけるわれらの父のすべての子たちのために」 「ここに集い、あなたからの大きい豊かな恵みを待ち望む民のため、われらに好意的な人々のため、すべての真なる信もつキリスト教徒たちのため、さらに願おう」 「あなたは憐れみ深く人を愛する神、われらはあなたを讃め称える、父と子と聖霊よ、今もいつも世々とこしえに」。 会衆「アーメン」。

続いて「完遂連祷」である。「われらの朝の願いを、主に向けてまっとうしよう」 会衆「主よ憐れみたまえ」（以下司祭の各導句に続ける） 司祭「神よ、あなたの憐れみによって、われらを守り、救い、憐れみ、強めたまえ」 「この日一日を通して、完全に、聖性のうちに、平安に、罪なく過ごすことができるよう、主に求めよう」 会衆「主よ叶えたまえ」 以下、会衆の「アーメン」まで、晩課においてなされたのと同じの祈禱が行われる。

司祭（会衆の側に顔を向け）「あなたがたすべてに平安があるように」 会衆「あなたの霊にも」 司祭「主に頭を垂れよう」 会衆「主よ、あなたに」

司祭の黙祷「聖なる主よ、いと高きところに住まわれる方よ、あなたは下界に住める者たちにも目を注ぎ、すべてをみそなわすその目ですべての被造物に目を注がれる。われらは靈的にも肉体的にも、あなたに礼拝を捧げ、さらに（靈的に）願いを注ぐ。聖なる者たちの聖なる方よ、どうか、目には見えぬあなたの腕を聖なるあなたの住まいから広げ、われらすべてを祝福したまえ。もしわれらが何か、意図的にあるいは心にもなく罪を犯したならば、善き方にして人を愛する神たるあなたは、どうか赦したまえ、そしてこの大地と大地を越えた賜物をわれらに与えたまえ」。続いて司祭は声を挙げ「なぜならわれらの神よ、あなたには、われらを憐れみ、われらを救うことが相応しい。父と子と聖霊よ、われらはあなたを讃える、今もいつも世々とこしえに」。 会衆「アーメン」。

以下「大散会定式」である。司祭「叡智！」 会衆「祝福を与えたまえ」 司祭「キリスト、われらの神がとこしえに祝せられ、讃えられますように」 会衆「神よ、真の普遍的信仰を、世々とこしえに力づけたまえ」 司祭「いと

も聖なる神の母よ、われらを救いたまえ」 会衆「ケルビムよりも尊く、セラフィムよりも類いようもなく栄えある方、あなたは神を、御言葉を、陣痛なくお産みになった。真なる神の母よ、われらはあなたを誉め歌う」 司祭「あなたに栄光あれ、キリスト・われらの神よ、われらの希望よ、あなたに栄光あれ」 会衆「栄光は」「今も」「主よ、憐れみたまえ」(×3)「主よ、祝福を与えたまえ」 司祭「死者たちの中から復活したキリスト(祝日は異なる)、真なるわれらの神よ、いとも聖なる母、きょうその逝去という高貴なる記念日を祝うわれらは、この聖母の祈りを通じ、また聖にして栄光に満ちすべてを越えて誉れある使徒たちと、すべての聖人のとりなしを通じて、善意に満ち人を愛する方として、われらを憐れみ救いたまえ」。 会衆「アーメン」 司祭「主の祝福が、その恵みと人への愛とともにあなた方にありますように。今もいつも世々としえに」 会衆「アーメン」。

以上で、8月15日ダーモーツでの朝課は終えられた。主日の朝課の次第も、上記のものが祝日性を併せていた点を除けば、同様の展開で進められる。

—— ・ ——

十四. なお、週日には上記の「大栄唱」の代わりに「小栄唱」(読誦栄唱)と呼ばれるものを唱える。これは「大栄唱」を①③②の順に読み、その後「主よ、あなたの恵みは永遠、あなたの御手の業を取り去りたもうな。誉れはあなたに相応しく、歌はあなたに相応しい。父と子と聖霊よ、栄光はあなたに相応しい。今もいつも世々としえに。アーメン」と続く。以下「われらの朝の願いを」以下の完遂連禱に移り、会衆の「アーメン」まで進んだ後、週日のための「先句スティヒラ」が続く。この部分は主日祝日朝課にはないものであり、週日朝課のほうがこの分だけ長大となる。

司祭用祈祷書138頁；「通常は『八調書』より当該週の調のものを、祝日期間中は祝日用のものをを用いる。第一章句には先句はなく、第二・第三章句の先句として次のものが挙がる。「われらはあなたの朝の憐れみに満たされ、日ごと喜びし楽しむ。あなたがわれらを低きものとされた日々のゆえに喜び、寂しさを見出した年月のゆえに踊る」。「あなたのしもべたちと創造物に目を注ぎ、その子らを導きたまえ。われらの神なる主の光がわれらの許にありますように。あなたの御手の業をわれらの上に実現させ、われらの手の業を導かせたまえ」。土曜日の先句としては「われらの主よ、あなたが選び、あなたの許に受け入れられた者たちは幸い」。「その人々の霊は善に留まる」。「彼らの記憶は諸国の民より民に及ぶ」。「栄光は」「今も」。「栄光は」「今も」には、それまでと同じと

ころからスティヒラを取る。だが聖人のためのものがある場合にはそれを、祝日期間中は「今も」の次に祝日のためのスティヒラを、他の場合には「栄光は」に適う聖母讃歌を歌う。スティヒラの後、「おおいと高さ方よ、主を讃美し、あなたの名に歌を歌うことは善きこと」。「朝にはあなたの憐れみが、夜にはあなたのまことが告げられるように」と読む。

その後「聖なる神、聖なる力、聖なる不死なる者、われらを憐れみたまえ」(×3)、「栄光は」「今も」、「主の祈り」に続けて、聖人のトロパールである。もし聖人が一人ならそのトロパール、「栄光は」「今も」、その調に適う聖母讃歌。もし聖人が二人なら、第1聖人「栄光は」第2聖人「今も」その調に適う聖母讃歌。祝日期間中は聖母讃歌に代えて祝日トロパールが占める」。続いて「重連祷」(上記)、続いて「叡智!」「祝福を与えたまえ」「キリスト、われらの神がとこしえに祝せられ、讃えられますように」「アーメン」。続いて「常なる初め」(晩課参照)の「来たれ」以下の部分から、一時課へと続いてゆく。

5. 「テュピコン」の規定にみるその神学

本稿では、スティヒラやトロパールを締める聖母讃歌の規定を通して、ビザンティン典礼の根底にあるものが、復活という神秘をその核心に置きつつも、日々記念される聖人の生涯に顕れた「神の像」としての人間が持つ天上性にも十全に目を向けていることを指摘してきた。特に聖母讃歌の「調」が、その週の調にしたがう場合には復活のキリストを示す一方、通常はむしろ聖人の栄唱の調に従うことで、聖母がわれわれ人間にとって「共なる存在」であることを示している点に改めて注目したい。

本稿では8月15日「聖母の御眠りの祝日」を例に取ったが、他の聖母祝日にも同様の規定が適用される。たとえば9月8日「聖母の誕生」のテュピコンでは、「もし日曜日に当たったばあい——そして聖母の他の祝日でも同様であるが——、まず八調書の復活の歌を歌う。だが朝課では復活の福音を読むことはせず、祝日のプロキメンと福音を読む」とある。したがって、聖母の祝日と復活の寿ぎとが重なった場合、あくまでも復活の寿ぎが優位に立つものの、聖書朗読においてのみ聖母のもつ祝日性を保持し、こちらを優先させるわけである。ただ11月21日「聖母の神殿奉献」のテュピコンでは、「この日は、もし日曜日に当たったなら、まず八調書の復活の歌を歌い、朝課では復活のプロキメンと福音を読む」とある。この例外規定は、聖母の祝日の中では11月21日の

み適用されるものであり、この日のみ、聖書朗読における聖母の祝日性に対しても復活の壽ぎが優位に立つ。

これ以外の日、たとえば3月25日「聖母へのお告げ」も上記の原則に倣うが、この日は季節上、受難節あるいは年によると復活節と重なりかねず、事情はややこしくなる。3月25日のテュピコンは次のようになっている。「1. この祝日が大齋中の日曜日もしくは月曜日に当たった場合、リティアは大晩課とともに、大齋中の他の曜日に当たった場合、リティアを晩堂大課とともに執り行う。2. この祝日が大カーノンの木曜日(大齋第五木曜日)に当たった場合、大カーノンは先行する月曜日の夜に執り行う。それに伴う奉神礼は適切な移動を蒙る。3. 聖体礼儀は、日曜日(枝の主日を除く)には大バジルの祈りとともに行う。他のすべての場合には金口の聖ヨハネの典礼が、月曜から金曜までは晩課をともし、土曜日には晩課なしで行われる。4. トリオードの勤めは祝日の勤めと並行して行われねばならない。朝課の末尾には、月曜より金曜までは読誦栄唱を読み上げる。土曜と日曜は歌による大栄唱がある。5. もし聖金曜日に当たった場合、金口の聖ヨハネ典礼を晩課とともに執り行う。聖体礼儀の閉祭ののち、晩課の先句スティヒラを歌い、そののち晩課の通常の行列をもって墓の周りの行列を、他のケースと同様に執り行う。厳格齋は聖体礼儀までで、その後はただ自制が義務づけられる。6. 復活の主日と復活の週には、祝日の勤めはテュピコンの個々の規定に基づき復活の記念の枠内に収められ、リティアはない」。

2007年は3月25日すなわち「受胎告知の祝日」が主日に重なった。そしてこれは大齋期間中であった。この場合、主日の聖体礼儀では、受難節中の主日に行われる「聖バジル典礼」が用いられることはなく、通常の主日に用いられる金口の聖ヨハネ典礼が行われた。つまり主の受難よりも聖母の壽ぎが、主日における復活の壽ぎとあいまって優位に立つわけである⁹。

一方、たとえば12月18日より24日の間の主日は「旧約の聖なる師父たちの記念」の移動祝日である。これは降誕祭の前週に当たり、降誕祭のための「前祝日」の期間と絡み、また相互の曜日位置関係からテュピコンの規定も複雑となる。テュピコンでは「もし(当日が)12月18日ないし19日に当たった場合には、当該調より6スティヒラを歌い、4スティヒラを師父のものより採る(前祝日は執り行わない)。20から23日の間に当たった場合には、復活の壽ぎは単に4スティヒラを歌い、前祝日を3つ、師父を3つ行う。24日に当たった場合には復活の壽ぎはせず、師父を前にもってきて6スティヒラを行い、前祝日を4つ

行う」とされる。

以上挙げたのは、実に微細な規定を伴う「テュピコン」のごく一部に過ぎない。ただその中でも、ビザンティンの人々による伝承の精華を見出すことができたと言えるだろう。それは、年毎に曜日が変動するなかで、「キリストの復活」という時間と歴史を超越する神秘のまえに、聖母の記念、あるいは諸聖人のための祝賀といった要素を、一日の典礼式次第の中にかに秩序立てて盛り込んでゆくかという問いへの、きわめて精緻な回答だったのである。

結

本稿では、筆者のダーモーツ修道院滞在の経験を活用する意味で、8月15日「聖母の御眠りの祝日」を例にとり、「テュピコン」の規定を参照しながら、ギリシア・カトリック教会におけるビザンティン典礼の次第を辿ってきた。司教区聖堂用の祈祷書は、特に可変部分に関して正確にテキストを掲載し、共同体として歌唱し挙行できるように工夫されていた。その一方実際の典礼では、晩課・朝課での「カティズマ」すなわち詩篇朗読を省略して「アンティフォン」のみの歌唱に留め、あるいは長大な「カーノン」については、その閉じの意味を持つ「カタヴァスィア」の連唱に限定するなど、信徒の現実生活に対応したかたちで式が進められていた。もっとも、可変部分の歌唱を通じて主日／週日という曜日感覚が絶えず研ぎ澄まされ、かつ日々の聖人への意識も保たれていることは事実であり、そこにはビザンティン典礼の本質である「宇宙的感觉」に根ざした「一期一会」の精神性が力強く継承されていると言えるだろう。

- 1 その次第、およびギリシア・カトリック教会の歴史に関しては、拙稿「伝承と国際性——ハンガリーのギリシア・カトリック教会——」(筑波大学比較文化学類『比較文化研究』第3号26-36頁, 2007年)を参照。
- 2 拙稿「復活祭の日付と論争」(地中海学会編『地中海の暦と祭り』260-262頁所収, 2002年)を参照。
- 3 拙稿「ビザンティン典礼暦から読む旧・新約聖書——古代学の源泉としての「メノロギオン」(1)——」(筑波大学大学院人文社会科学研究所 文芸・言語専攻紀要『文芸・言語研究』文芸篇52, 1-38頁, 2007年)を参照。
- 4 *MÉNEA I. : Szeptember-Október, A fordítást a Rómában 1888-ban görögül kiadott MÉNAIA I. kötete alapján Dr. Rohály Ferenc kézírata alapján átdolgozta: Orosz Athanáz szerzetespap, Nyíregyháza 2002; MÉNEA II. :*

November-December, Rohály Ferenc kézirat fordításának átdolgozott kiadása, Nyíregyháza 1998; *MÉNEA III. : Január-Február*, A fordítást a Rómában 1896-ban görögül kiadott MÉNAIA III. kötete alapján Dr. Rohály Ferenc kézírata alapján átdolgozta: Orosz L. Athanáz szerzetespap, Nyíregyháza 2005; *MÉNEA IV. : Március-Április*, A fordítást a Rómában 1898-ban görögül kiadott MÉNAIA IV. kötete alapján Dr. Rohály Ferenc kézírata alapján átdolgozta: Orosz Atanáz szerzetespap, Nyíregyháza 2006).
なお本稿で扱う8月の分は第6巻に収められるため、未刊である。

- 5 この部分はハンガリー語版メノロギオンにはなく、仏語版 *Ménée d'Août* (tr. par Péré Denis), Chevetogne 2007, 185を参照した。
- 6 この部分に関しては、仏語版 *Paraclitique ou grand octoéque* (tr. par P. Denis Guillaume), Parma 1995, 110を参照した。
- 7 この部分はアタナーズ神父に確認するとともに、仏語版 *Ménée d'Août* (tr. par Péré Denis), Chevetogne 2007, 195を参照した。
- 8 Kozma János, *Kivonatatos Typikon: egyházi naptár és szertartási utasítás*, Budapest 1984, 21.
- 9 バジル典礼に関しては、拙稿「聖バジル典礼における奉献文の神学的地平——ニュッサのグレゴリオス『人間創造論』解釈に向けて——」(『エイコーン——東方キリスト教研究——』第34号44-64頁, 新世社, 2006年)を参照。